
TALES OF SYMPHONIA
テイルズ オブ シンフォニア
ラタトスクの騎士
矢島さら
テイルズ オブ シンフォニア
ラタトスクの騎士
果てない想い 上
ファミ通文庫

矢島さら
Sara Yajima

横浜市生まれ。ゲームノベライズを中心に、ファンタジー小説やエッセイなど、幅広いジャンルの執筆を手掛ける。また、カエルを心から愛してやまない「かえる友の会」会員として、精力的に活動中。主な著書に『テイルズ オブ』シリーズ（エンターブレイン）、『まきこママの通販推理生活』（ベネッセ）、『ガーコとケロタン』（世界文化社）他多数。
http://sarah.m78.com/

株式会社バンダイナムコゲームス
奥村大悟
Daigo Okumura

『テイルズ オブ シンフォニア-ラタトスクの騎士-』、『テイルズ オブ ザ ワールド～サモナーズ リネージ～』など『テイルズ オブ』シリーズのキャラクターデザインを数多く手掛けたほか、テレビアニメ『エレメントハンター』ではキャラクター原案を担当。ファミ通文庫『テイルズ オブ シンフォニア-ラタトスクの騎士-世界（とき）の願い』（全3巻）のイラストも手掛けている。

カバーイラスト　株式会社バンダイナムコゲームス 奥村大悟

テイルズ オブ シンフォニア-ラタトスクの騎士-

果てない想い上

矢島さら

FB
Famitsu Bunko
ファミ通文庫


Emil
Marta
Decus
Alice
Tenebrae



テイルズ オブ シンフォニア

TALES OF SYMPHONIA

ラタトスクの騎士

果てない想い 上

Contents



テイルズ オブ シンフォニア－ラタトスクの騎士－

果てない想い[上]

矢島さら

Famitsu Bunko
ファミ通文庫

口絵・本文イラスト　株式会社バンダイナムコゲームス　奥村大悟

第一話　アリス

プロローグ

うつ伏せに倒れた肩先や胸から、ごつごつした感触が伝わってくる。

ギンヌンガ・ガップには、ここで命を落とし、無残に朽ち果てた魔物たちの骨が転がっていた。形を残しているものはまだいいほうで、その下にはすでに砕け崩れた骨の粉が堆積しているのだろう。ここは魔物の墓場なのだ。

アリスは必死に体を起こそうと、小さく呻いた。

（デ……クス……）

すでに息をしていないデクスの体が横たわっているのが、霞み始めた目に映る。少しでも彼のほうへ近づくために、震える手を伸ばした。

――アリスちゃん……キモイって言われると思うけど……。

デクスの声が甦る。

――好きだったよ……。

最期の言葉だった。幼いころから今までに幾度好きだと言われたか、数えることもできない。それでも、過去形で告げられたのは最初で最後のことだった。

（デクス……）

彼がエミル・キャスタニエの剣に倒れたとき、アリスは我知らず絶叫していた。立っていられなくなり、膝から崩れ落ちた。

――……私も……好きだったのに。ホントに……好きだったのにっ！

あの声はデクスに届いただろうか。

（デクス……こんなことなら、もっと……）

エミルがなにか言っている声が聞こえる。応えているのは、まだ彼女の武器のスピナーを手にしているであろうマルタ・ルアルディ。

「くっ……」

アリスは渾身（こんしん）の力を振り絞って、前へ這い進んだ。

「デクス……。今……アリスちゃんも……」

だらりと投げ出されたデクスの、男にしては細い指に手を伸ばす――。

マルタに斬られた傷の痛みが遠のいてゆく。かわりに、ゴオオッという音が微かに聞こえ始めた。

風だろうか。ギンヌンガ・ガップに風は吹かない。あれはハイマに吹きつける強い風の音だ。

――還（かえ）るのね……。

アリスは微笑んだ。

デクスと出会った幼い日のハイマには、まだあの孤児院があるはずだ。

風に煽（あお）られた屋根の端がめくれるたびに子どもたちが修繕にかり出された、古い建物。

狭い庭をときおり訪れるのは、物好きな冒険者と迷い込んだ魔物だけだった。

ペンキの剝げた外壁、歪（ゆが）んだ枠にかろうじて残っている割れた窓ガラス――。

アリスは自分を呼ぶ音に耳を澄ませる。もう少しも苦しくない。

風が強くなった。

第一章

昨夜からの風がすっかり雲を吹き散らしてしまったようだった。
澄み渡った空は青く、その下のはるか彼方にそびえたつ救いの塔まで見渡すことができる。
「はあぁ～。今日もいい天気だなあ」
建てつけの悪い勝手口のドアから外に出たデクスは、「うう～ん」と伸びをした。
両腕を等分に上げたつもりだが、力の入り具合がちくはぐなのか、左側だけ肘(ひじ)が伸びない。ひょろりとした体躯から発する声も、変声期にはまだ早いというのに、なんだか不安定に震えていた。
そのとき、
「おい、デクス！　どこ行った？」
建物の中から彼を呼ぶ声が聞こえた。
「……あ？」
あくびをしながら振り返ると、ひょいと顔を出した赤毛の少年と目が合った。
「またそこにいたのかよ」
「おはよ、ジャグ」
デクスがにっこりと笑うと、ジャグと呼ばれた少年は苛立ち、小さく舌打ちする。

「早く朝飯作れよ。今日は少し急ぐようにって院長先生が言ってたろ？」
「……え」
デクスは首を傾げ、ゆっくりとすぐ目の前の断崖絶壁に視線を戻す。
「ぼく、今日、朝食当番だったたっけ？」
「昨夜(ゆうべ)、教えてやったろう」
ジャグの足音が迫ってきた、と思ったとき、デクスは後ろから思い切り頭をはたかれていた。
「い！　……たい」
「痛いか。ここから突き落とされたらもっと痛いぞ」
ジャグはデクスを突き飛ばす手つきをしてみせると、
「台所で火を熾(おこ)すほうがずっといいだろ？　さっさと行けよ」
と、意地悪く笑いながら戻って行った。
「……そうだよなあ。ここから落ちたら痛いよなぁ」
デクスは素直に頷くと、崖のふちに申し訳程度にしつらえてある柵に手をかけ、下を覗き込んでみる。まだ朝早いせいか山道を登ってくる者は見えなかった。
ここハイマは、冒険者たちの集(つど)う村といわれているらしい。確かに世界中からやって

来る男たちをデクスも毎日のように目にしているが、彼らはごくたまに崖から落ちる。たいていは魔物と戦っている最中か、酒に酔ってケンカをして足を踏み外すかのどちらかだった。命を落とすことも少なくない。

「やっぱり痛いのはいやだな。ごはん作ろう」

デクスはぶたれた頭を掻きながら、彼の住処(すみか)である建物——孤児院の勝手口へと踵(きびす)を返(かえ)した。

厨房(ちゅうぼう)に入ると、バーニィが籠(かご)に入れた二十個あまりの卵を持ってやって来たのに出くわした。毎朝ありつけるわけではないが——他の日に収穫できた分は、村の店に売りに行くことになっていた——、卵料理のある日はひとりにひとつずつ使うので、かなりの量になるのだ。彼は先ほどからひとり鶏小屋(にわとりごや)で忙しく立ち働いていたらしい。

「バーニィ。僕、当番みたいなんだけど、なにすればいい？」

「デクス。おまえ、ちゃんとトイレに行けよな」

「え？」

「鶏じゃあるまいし」
バーニィは新鮮な卵をひとつ手に取ると、薄汚れた窓から差し込む朝日に透かして見る。
「……？」
意味が分からず、デクスはぼうっとその場に立ち尽くしていた。
「まあいいや。ほら、早くフライパンを出せって。あっ、待て。手ぇ洗ったか？」
棚から鉄製の重いフライパンを下ろそうとのろのろ伸ばした手を、バーニィにぶたれる。
「い、たい」
「ジャグがみんなに言いふらしてたぜ。毎朝寝ぼけて、崖の上かららしちゃうんだって？やばいよそれ」
「え……？　ええっ⁉」
ようやく事情がのみこめたデクスは、激しくかぶりを振った。
「ち、違うよ。ぼくは朝の新鮮な空気を吸ってただけだよ。そんなことしてさ、もしちょうど下を魔物が通りかかったりしたら大変じゃないか！」
ぶるっと身を震わせるデクスに、バーニィは苦笑する。

「ま、俺は本気にはしてなかったけどさ」
「……なんでジャグはそんなでたらめを言うんだろう」
するとバーニィはゆっくりとデクスの顔を見た。
「わかんないのか？　おまえ、いじめられてるんだよ」
「え？」
「そもそも今日の朝食当番は俺とあいつなんだから。かわいそうにな」
「そうだったのか……」
デクスはズボンでごしごしと手をふくと、今度こそフライパンを棚から下ろした。
「ジャグはみんなと一緒にいるのかな」
「いや。どうせまたスカイのところだろ」
スカイというのは、院長の息子の名だった。まともに相手にされないので、デクスは彼のことをあまりよく知らない。知っているのは、ふた親が揃っているのに孤児院で生活をしていて――部屋は別棟(べつむね)にあり、孤児たちとは別だが――、ジャグを子分のように扱っているということだけだ。
ジャグにもそれなりの余禄――食事や掃除の当番を誰かに押し付けても許される――があるというところまで、デクスの考えは及ばなかった。

「そういや、院長夫人が帰ってきてるよ」
「ふーん、気がつかなかった」
「でも、また、昼前に救いの小屋に戻るんだと。だから、今朝はのんびりしていられないんだ」
バーニィは言い、籠の卵を指さす。
「時間がないから目玉焼きでいいよ。俺は食堂に行って皿を並べてくるから」
「えっ、二十人前以上あるよ。ぼくがひとりで作るの？」
「できるさ、デクス。おまえならな」
ぽんと肩に手を置かれると、デクスの頬に笑みが浮かんだ。
「そうだね。ぼくならできるね」
「そのあとスープを温めてパンを焼いて、小さい子たちを起こしたら、ミルクを注ぎ分けて、院長先生夫妻のコーヒーもいれるんだぞ」
「うん。わかったよ」
バーニィが台所から出て行かないうちに、デクスはがしゃがしゃと卵を割り始めた。

「みなさん、おはようございます」
がやがやしていた食堂の中が、一気に静まり返る。幼児から、上は十五、六歳までの子供たちだ。
いつもなら朝食当番が料理を並べるやいなや、行儀悪く食事になだれこむところだ。
「お久しぶりですね」
微笑みながら入ってきた中年女性は、エイリーン・フォーブ。院長夫人だった。
「みなさんにマーテルさまのご加護がありますように」
いつものようにエイリーンはそう言った。
敬虔なマーテル教信者である彼女は、ハイマの孤児院に落ち着いているということがない。世界各地にある救いの小屋を回り、旅業中に立ち寄る信者たちの世話をしているらしい。孤児院経営の実権も、実は院長ではなく夫人が握っているというまことしやかな噂もあるほどだった。
「エイリーン先生、また太ったんじゃない？」

女の子たちがひそひそと囁(ささや)き合(あ)うのに、「うるせぇな」とジャグが睨(にら)む。
「やあね。スカイの腰ぎんちゃく」
くすくすと笑いが漏れた。
そのとき、長テーブルの端に座っている院長が咳払いをした。エイリーンは夫を一瞥(いちべつ)したが、すぐに、
「私は先日、教会の用事でアスカードへ赴(おもむ)きました……」
と、自分の息子を含む二十数人の子供たちに等しく視線を向け、いったん唇をとじる。
思わせぶりな間に、何人かの子供の顔に緊張が走るのを、エイリーンは満足げに見てとった。
「そうね。アスカードには恐ろしい牧場がありますね」
デクスも斜め向かいに座っている小太りのベンと、自分の並びにいるケイティにちらりちらりと視線を走らせる。黒髪を長く伸ばしたケイティは、女の子の中ではいちばん年が上だ。
(ふたりとも、パパとママはアスカードで死んだって言ってたっけ)
ハイマという場所柄、アスカードで孤児になった子供がここには何人もいる。彼らの両親はたいてい人間牧場で強制労働させられたのちに病死しているか、捕まった際に抵

抗したせいで、ディザイアンに殺されるという末路をたどっていた。
「でも、心配しないで。私はそこへ行ったわけじゃないの。マーテルさまのお導きによって、近くのおうちに保護されていたお友だちを迎えに行ったんですよ」
「お友だち⁉」
少女たちが目を輝かせた。
「エイリーン先生、新しいお友だちが来るの？」
急にそわそわしだした女の子たちに、スカイが答える。
「そうだよ。俺、もう昨夜会ったもんね」
「俺も会ったぜ」
ジャグがすかさず言い添える。
「ええ～、いいなあ！　男の子？　女の子？」
「何歳？」
口々に問いかける女の子たちを、院長夫人はにこにこしながら眺めている。
（おなかすいたな……）
デクスは、自分の前に置いてある皿に視線を落とした。
（せっかくうまく焼けたのに、冷めちゃうじゃないか）

白身の真ん中につややかに盛り上がっている丸い黄身。フォークを刺したら、半熟のそれはとろりと流れ出すに違いない。好物を舌にのせるところを想像して、デクスはぐびっと喉を鳴らした。

(そうだ。さっさと話を終わらせればいいんだ)

「ねえおばさん」

顔を上げざまそう呼ぶと、エイリーンが一瞬ぎょっとした表情になる。

「おばさんじゃないだろ。エイリーン先生だ。いい加減、先生の名前くらい覚えろよ」

隣にいたバーニィが小声で言い、デクスの肘を突ついた。

「ほら、スカイが睨んでる。知らないぞ」

が、デクスはただ「あ、そうか」と頷き、

「ねえ、その子も捨て子なの？」

と、悪びれずにエイリーンに訊ねた。

「いいえ、デクス」

院長夫人は、

「朝食の席で言うつもりはなかったけれど……彼女のご両親は魔物に殺されたのよ」

と、ため息混じりに答えた。

「聞いた？　彼女だって！」
「女の子なんだ。やった！」
ケイティたちがうれしそうに頷きあう。
「残念だったな、捨て子のデクス！」
「仲間ができると思ったんだろ？」
「何年ここにいるんだよ。先生の名前も覚えられないバカデクス～！」
男の子たちが囃したてると、他の子供たちもどっと笑い、食堂は大変な騒ぎになってしまった。
「あなた」
すっかり話の腰を折られてしまったエイリーンの棘のある声に、院長は苦い顔をしながら立ち上がる。
「さあみんな、喚いてるその口で、さっさと食事を始めろ。だいたいおまえがよくないぞ」
と、デクスのほうを顎でしゃくった。
「え」
なんでぼくが、とデクスは考えたが、よくわからなかった。

（ま、いいや。これでやっとごはんが食べられる）

いっせいに食事を始めた子どもたち――「お祈りをしなさい」とエイリーンが叫んでいたが、みんな形だけしかしなかった――に遅れをとり、デクスがフォークを手に取ったときだった。

「いやぁ！　このたまご、じゃりじゃりする！」

ケイティの隣の席にいる小さなテレサが泣き出した。ケイティは自分の手のひらに卵を吐き出させ、

「ああ、こんなに殻が入ってる。誰？　けさ目玉焼き焼いたの」

と、目を吊り上げてテーブルを見回した。

「……」

デクスが黙って立ち上がる。

おまえが当番かよ、とジャグがしらじらしく呟いた。

「……ごめんよ、テレサ。すごく急いで焼いたんだ……泣かないで。ぼくのと替えてあげるから」

「いやっ！」

テレサは顔を真っ赤にして叫んだ。

「なんで」
「デクスの卵、白いとこばっかりだもん！」
「え？　なに言って……うえぇ」
テレサの指差す先、自分の皿に目を落としたデクスは、思わずまぬけな声をあげてしまう。いつの間にか黄身がきれいにくり抜かれてなくなっていた。
「こいつ、テレサの分までおいしいとこ食うつもりだぜ」
「捨て子だからねぇ」
唇の端を黄色く染めたスカイとジャグが顔を見合わせて笑う。他の子供たちもにやにやしているばかりだ。
（ぼ、ぼく、食べてないのに……）
とろりとした感触が、舌の上から淡く消えてゆく。
デクスはひとり呆然（ぼうぜん）と突っ立ったまま、自分の皿とテレサのそれを見比べていたが、
「……じゃあ、かしてごらん。ぼくが殻を全部とるから」
と、手を伸ばした。

「おそいなあ」

少女はソファに腰かけたまま、ずいぶん長い間待たされていた。

お仕着(しき)せの服——彼女をひと月あまり保護してくれていたケインズ家の娘のお古だった——は少々短すぎ、むき出しの足を動かすと、古いソファの生地(きじ)がちくちく刺してくる。

彼女は、もう何度もやったように、院長室の内部をもう一度ぐるりと見回す。昨夜連れてこられて一夜を過ごした別棟の部屋に比べると、ずいぶんとさみしい印象だった。

厄介払(やっかいばら)い。

ふいに、別れ際、ケインズとその家族たちに言われた言葉が脳裏(のうり)に浮かぶ。

——行き先が決まって本当によかった。これでやっと厄介払いができるよ。

少女は、その記憶を振り払うように、何度も首を振った。

「おそいなあ」

さすがに不安になってきたとき、ドアがノックされた。

「アリス、お待たせ」
「エイリーン先生」
アリスと呼ばれた少女はすとんと床に足をつくと立ち上がる。
「騒がしいでしょう。いつもあんな風なのよ。院長先生が子供たちに甘いから」
エイリーンは部屋に入ってきながら顔を顰めて見せ、アリスの小さな手をとった。
「でも大丈夫。なにも心配いらないわ。あなたもすぐにここの生活に慣れるわよ」
「そう？」
アリスは太くて温かい指に自分の手を預けたまま、まっすぐに院長夫人を見上げる。
「ええ、そうですとも。あなたはとても可愛らしいし、みんなに好かれるわ……たぶんね。優しいお兄さんやお姉さんもいっぱいいるのよ。さあ、行きましょう」
手を引かれ、アリスは廊下に出た。朝の空気の中に古い木材の匂いがした。さっき別棟からここへ連れられて来たときは気づかなかったが、廊下の隅に赤土がうっすら積もっている。食堂へ着くまでの間、アリスはずっと風の音を聞いていた。
「みなさん。食事の手を少しとめてくださいな。お待ちかねのお友だちよ」
エイリーンが声をかけると、子供たちはがちゃがちゃとフォークやスプーンを置いた。
「アリスよ。もうすぐ四歳。かわいいでしょう？」

エイリーンは、アリスの肩の上で切りそろえた髪を撫で、微笑んだ。
「うわー、金髪だ」
「きれい！」
「かわいい！」
アリスは自分に向けられる賞賛の声を行儀よく受け止めていた。どうやら歓迎されているらしい。
どういう成り行きでこうなったのかはわからなかったが、両親がいなくなってしまった今、これからの自分の居場所はここなのだということだけは理解できた。
「アリスの席は、ええと……」
「ここだよ」
スカイが母親にデクスの向かいを指差した。たしかに手付かずの朝食が置いてある。
「じゃあアリス、そこに座ってごはんを食べてね。みんな、アリスのお世話をしてあげるんですよ」
エイリーンは言い、それからふとデクスに目を止めた。彼はアリスのほうを見ようともせず、皿の上に覆いかぶさるようにしている。
「……ま、いいわ」

アリスを席に着かせると、エイリーンはそのまま食堂を出て行った。そのとたん、子どもたちはまた騒ぎ出した。すでに院長も席を立ったあとだ。
「アリス。あたしケイティよ。仲良くしましょう」
「うん」
アリスは、さっそく身を乗り出して声をかけてきた年上の少女に頷いてみせる。
「なあ、アリスって小柄なのかなあ。テレサより上だろ？　同じくらいに見えるけど」
「そうね。四つになるにしてはちっちゃい……」
ケイティがバーニィに応えかけたときだった。
「でっかい！」
突然、デクスが叫んだ。アリスはびくっとして、目の前に座っている紫色の髪の少年を見つめた。
「でっかいでっかい！　やったぞ！　最後にこんなでっかい殻が取れたっ！」
デクスは得意げに、皿をテレサの方へ突き出す。
「ほら、もう食べられるよ」
「……いらない」
皿の上の卵をひと目見るなり、テレサはいやいやをした。

「どうして。おいしいよ」
「ぐちゃぐちゃ、いや」
「え……」
デクスはさんざん指でほじくり穴をあけ、ぼろぼろになった目玉焼きを見、首を傾げた。
「そんなでもないと思うけど」
「あーあ。作り直してやればいいのに」
隅のほうに座っていた男の子が聞こえよがしに言う。
それは無理だよ、とバーニィが口をはさむ。
「今朝は俺が集めたんだけど、全部デクスが焼いちゃったし……もともとエイリーン先生とアリスの分を入れたら、ちょうどの数しか卵がなかったんだ」
すると、すでに食事を終えたジャグが口を開いた。
「そんじゃあ鶏に土下座（どげざ）して産んでもらうしかないいな」
「えっ、鶏って、土下座したらまた産んでくれるの？」
真顔で訊ねるデクスに、
「そうだよ。ほら、早く鶏小屋へ行って来いよ」

スカイが笑いを噛み殺す。アリスが彼らのやりとりを不思議そうに見ているのに気づいたケイティは、
「本気にしちゃダメよ、アリス。デクスはバカなの」
と、小声で言った。
「デクス……」
「え？」
名前を口にされ、デクスは初めて目の前にいる少女に気づいた様子で、
「あれ……えっと、誰だっけ？」
と、アリスをまじまじと見た。
「おまえ、ホントにぼーっとしてるよなあ。アリスじゃないか。聞いてなかったのか」
バーニィが呆れる。
「デクスはね、たまごをほじくってた。からが入ってた」
アリスが言うと、
「うんうん。そうね、アリスは賢いねぇ。かわいいしね」
と、ケイティが機嫌をとるような調子で応えてやった。
「ふーん。それはどうかなぁ」

「しっ！　ジャグ。よけいなこと言うな」
意地悪い目つきになったジャグを、なぜかスカイが鋭く制した。
アリスはそっと目を伏せる。両親と死に別れてから、何度も人々から向けられる独得の感情を受け取ったからだった。
「そうか。そういえばおばさん、新しい子が来るって言ってたなぁ」
「エイリーン先生、でしょ。ほんとバカなんだから」
目玉焼きを食べそこね、ぐずりだしたテレサの肩を抱いてやりながら、ケイティがデクスを睨む。
「デクス……バカなの？」
アリスがぽつりと言う。それを聞いたデクスは、
「違うよ。ぼくはバカじゃないよ」
にっこり笑い、席を立った。すかさずバーニィが牽制する。
「おいおい。ほんとに行く気かよ。鶏がそんな都合よく卵産むわけないだろ」
「ええー、なんだ、産んでくれないの？」
大げさに驚くデクスに、ジャグが唇を歪める。
「そもそもあいつらに土下座の意味がわかるかっての。おまえに冗談言ってもぜんぜん

面白くないよ。少しは考えろ」
(あーあ)
アリスは幼心にもうんざりしながら、ミルクのカップに手を伸ばした。
(ここ、うるさいところだなぁ)
子供たちの無遠慮（ぶえんりょ）な視線がいっせいに集まるのを感じる。知らん顔をしていようと思ったとき、
「うっわー、アリス！　きみ、すっごくかわいい顔してるね！」
たった今気づいたように、デクスがまた唐突に叫んだ。
(デクス、バカ……)
アリスはその言葉を、ミルクと一緒に飲み下した。

ハイマの孤児院でのアリスの生活は、それなりに平穏に始まったかのように思われた。

少なくとも、最初の数週間は表だって何事も起きることはなかった。
抜けるように白い肌で、薄い金色の前髪の下には明るい茶褐色の瞳がいつも輝いている。幼いながらも、彼女の容姿には見る者を惹きつけずにはおかない魅力があった。さすがに男の子たちは遠巻きに見ているだけだったが、それまで小さなテレサを甘やかすことで母性本能を満たしていた少女たちは、みんなアリスの世話を焼きたがった。当のアリスは死んだ母親から身の回りのことはできるだけ自分でするよう躾けられていたので、いっぺんにたくさんの姉ができてしまったことを少々うっとうしく感じないでもなかった。

少なくとも食事や入浴、着替えなどは、他人の手を借りる必要はない。もし、普通の三歳の女の子並みのことしかできなかったとしたら、アリスはハイマに来てすぐにひどい仕打ちを受けることになっていただろう。

差別が始まったのは、ある夕方のことだった。

孤児院では、夕食前に入浴をすませることになっていた。風呂場は比較的広く、たい

ていは女の子全員が一緒に入ったあと、男の子たちが使うことになっていた。
昼過ぎにやってくる数人の村の大人たち――いずれも熱心なマーテル教信者――が、夕食の準備をしながら湯を沸かしてくれるのだ。時には村の宿屋に宿泊している冒険者の男たちが薪割りなどを手伝ってくれることもあった。毎日というわけにはいかないが、入浴は孤児たちの少ない楽しみのひとつなのだった。
その日、いつものように先に入浴をすませた女の子たちは、小部屋に集まって濡れた髪を梳いていた。
厨房から野菜を煮込むいい匂いが漂い、風呂場からはいつものように大騒ぎしている男の子たちの声が響いてくる。
「ねえねえ、今日はみんなでみつ編みして、お揃いにしない？」
ケイティより少し年下のローズが提案すると、女の子たちは歓声をあげて賛成した。
ケイティはタオルで髪を拭いていたアリスのところへやって来ると、
「アリス、あっち向いて」
と、ブラシをあてようとした。
「私は、いい」
「どうして？　もう編めるくらいの長さはあるわよ。みつ編みしたまま乾かすと、ウェ

ーブがついてかわいいのよ。みんなでやらなきゃお揃いにならないじゃないの」
「……」
アリスは渋々ケイティに背を向ける。母親に髪を編んでもらったことは、一度もなかった。
「ほんとにきれいな色ね、アリスの髪は。私も黒髪なんかじゃなくって、こういう……っ⁉」
突然、ケイティが息をのんだ。
「なに？　どうかした？」
早々とテレサの髪を編み終えたローズが、ひょいとケイティの視線の先へ顔を向けた。
「……え……っ⁉」
彼女はそこに、露になったアリスの白い耳を認めると、真っ青になって震えているケイティの顔をおそるおそる見た。
「この……ハーフエルフがっ！」
女の子たちがハッとすると同時に、ブラシが床に叩きつけられる。アリスはケイティにどんと背中を押され、
「きゃっ」

そのまま壁に激突した。
なにが起きたのかわからないまま、床に倒れる。顔を上げると、ケイティが恐ろしい顔でアリスを見下ろしていた。
「汚らわしい……」
「……ケイティ？」
起き上がろうとしたアリスは、ローズたちがケイティの周りにひと塊になるのを見た。
「あたしのパパとママは、あんたの仲間に殺されたのよ！　よくもここに来れたわね！」
「……なんのこと？　私、なにもしてない……」
アリスは訳がわからず、
「仲間って、だれ？」
と、重ねて訊ねた。
「ふん。しらじらしい。ディザイアンの仲間のくせに」
「そういえばアリスって、アスカードから来たんでしょ。やっぱり牧場となにか関係があるんじゃ……」
ローズは言い、ケイティと顔を見合わせる。ケイティは震える拳を上げ、叫んだ。
「大っ嫌いよ、ハーフエルフなんか！」

「だめっ！　ケイティ！」
誰かが悲鳴をあげる。
「そうだよ。ハーフエルフは魔術を使うんだよ。アリスをぶったら、みんなヘビにされちゃう！」
「ハーフエルフは、小さくても大人(おとな)より頭がいいのよ」
「こわい！」
「助けて!!」
口ぐちに叫ぶ声がして、あっという間に小部屋に恐怖が満ちた。小さな子からわれ先にと廊下へ飛び出す。そして、
「なに騒いでるんだ？」
ちょうど入浴を終え、食堂へ行こうとやって来たジャグたちと角のところで鉢合わせした。
「アリスが、アリスが！」
「人間じゃない！」
「……」
ジャグは黙って、背後にいたスカイを振り返った。院長の息子はゆっくり前へ出てく

ると、
「今ごろ気がついたのかよ」
と、その場にいる女の子たちに向かって薄い笑いを浮かべて見せる。
「スカイ……、あんた知ってたの？」
ケイティが眉を寄せた。
「ああ。母さんに、バレるまでは黙ってろって言われてたからな」
「ひどい……」
「しょうがないだろ。おまえだけじゃなく、ベンの親父たちだってアスカードの牧場で死んだんだ。ハンツとダルの親はまだディザイアンに捕まってる。メリッサの家族もそうだよな？」
四人の子供たちは、返事もせずにうなだれる。
「だったら……、だったら最初から断ればよかったじゃない！　ハーフエルフの子をここに入れるなんて」
ケイティは唇を噛みしめた。
「母さんも、いろいろ立場とかがあるんだよ。事情を知らないでアリスを保護した家の人たちが迫害を受けそうになってさ、教会つながりで泣きついてきたらしいから」

「……あたし、あの子と一緒に暮らすのイヤだな」
顔を背（そむ）けてローズがつぶやいた。
「オレだってイヤだ！」
「あたしも！」
いっせいに騒ぎ出した子供たちに、
「イヤでもしょうがないだろ」
スカイは冷たく言い放つ。
「おまえたち、他に行くところなんてないんだから」
「…………」
それを言われると、みんな黙り込むしかなかった。

アリスは、ケイティたちが小部屋を出て行ってしまってからすぐ、あとを追って廊下へ出た。
が、すぐにスカイたちの声を聞き、とっさに壁際に身を寄せた。

ハーフエルフという言葉が頻繁に聞こえてくる。どうやら全員に知られてしまったらしい。
アリスは初めてハーフエルフといわれた日のことを、ぼんやりと思い出していた。
――ふた月ほど前のことだった。
アリスは両親に連れられて生まれて初めての旅をしていた。マーテル教信者なら誰でも旅業に出ることを教会から勧められるが、まだ小さいひとり娘を伴っての旅には、それなりの苦労があったことだろう。
各地のマーテル教会聖堂を巡っていた家族がアスカードの地にさしかかったときだった。古い石舞台のほかは特に観光する場所もない村から出ようとして、彼らは道を失った。実際にはほんの少し脇道にそれただけだったのだが、運悪く切り立った岩の陰から現れた魔物に追われ、山道へと入り込んでしまったのだった。
腹を空（す）かせていたのだろう、魔物はすぐに、母親にしっかりと抱かれたアリスに目をつけた。逃げ場はなかった。
アリスは低く唸りながら近づいてくる魔物を、まばたきもせずに見ていた。魔物が跳躍したとき、父親が叫びながら走り寄ってきたのを覚えている。彼はアリスたちの目の前で、あっけなく魔物の爪にかかって倒れた。

母親は、魔物が夫の骨を噛み砕く音と、あたりにたちこめる血の匂いに負けまいとするように、必死に何ごとかをつぶやき続けていた。

再び魔物が跳んだ。

「――アリス、逃げてぇっ！」

悲鳴と同時に感じた激しい衝撃。魔物が母親の肩を掴んで一気に引き裂く。反動で宙に放り出され、地面に転がったアリスは、言われたとおりあわてて体を起こそうとした。轟音と共にあたりに炎が渦巻いたのは、そのときだ。詠唱を続けていた母親の魔術がようやく発動したのだった。

魔物は突然の炎に驚いたのか、アリスにはもう見向きもせずに岩山の奥へと走り去ってゆく。

体の力が抜けていくのを感じながら、アリスはのろのろと立ち上がった。

大きく抉れた地面が、焦げた臭いを放っている。無残な姿に変わり果てた両親……。

魔物をまともに見ても泣かなかったアリスの瞳から、涙が零れ落ちた。アリスは大声を上げて泣き出した。

どれくらい泣き続けていたのか、気がつくと大人たちが五、六人、山道を登ってくるのが見えた。



「おーい、じょうちゃん、すごい音がしたが……大丈夫か!?」
　ふもとの村から来てくれたらしい。
「あああ、こりゃひでぇなあ」
「ちっ、魔物か……。岩までこんなに砕きやがって！」
「よしよし。こわかったね」
　中にひとりだけ混じっていた女が、アリスを軽々と抱き上げてくれた。
「これは、お父さんとお母さんかい？」
　優しく訊ねられ、ようやく泣きやんだアリスは、こくんと頷いた。
「かわいそうに。どこから来たの」
　岩と岩の隙間から生えている白い花に目が止まる。その薄い花びらはどちらのものともつかない血で赤く染まっていた。
「……りょぎょう」
「え？　ああ、旅業ね。それじゃよほど遠くから来たのかねえ。迷っちまったんだね」
　その女は、手分けしてアリスの父親と母親の遺体を片付けている男たちのうちのひとり——夫らしい——に頷きかけた。それからアリスの濡れた頬を優しく拭ってくれた。
「心配しなくていいわよ。とにかく、うちへおいで。山を刳り抜いて造った狭いうちだ

けど」
「待て！」
彼女の夫が鋭く制した。彼は母親の遺体を片付けているところだった。
「見てみろ」
男たちが遺体を覗き込む。
「……これは！」
「じゃあ、この子は……」
アリスは女の腕からもぎ取られ、地面に降ろされた。
ハーフエルフという言葉を最初に耳にしたのはそのときだった。
「道理でな。さっきの音、魔物にしちゃおかしいと思ったんだ」
「とにかく何も見なかったことにするんだ。いいな？　この子は誰かのところにやっちまおう……」
夫たちの話を聞きながら、女はおそるおそるアリスの母親の顔を覗き込んだ。そして、
「ケインズのうちがいいんじゃない？　あそこ、マーテル教に熱心だからさ」
と、振り向きざまに言った。
皮肉なことに、アリスがハーフエルフ特有の高い知性によって、自分はハーフエルフ

という生き物で、普通の人間たちからは忌み嫌われる存在なのだと認識するまでにいくらも時間はかからなかった。

「あっ、あそこにいるぞ」
アリスに気づいた男の子のひとりが、押し殺した声を出した。
子供たちの間に緊張が走る。アリスを振り返る者はいなかった。
「い、行こうぜ」
「うん。早く行かないとまた料理が冷めるって叱られちゃう」
彼らはぞろぞろと食堂へ移動して行った。
毎日うるさいほど世話を焼いてくれていたケイティたちも、もうアリスを見ようとはしない。
(私、行かないほうがいいみたい……)
その場に立ち尽くしていると、背後からどたどたという足音が聞こえた。
「おーい、風呂掃除終わったよ～！」

能天気(のうてんき)な声は、デクスだ。
「なんだか最近、しょっちゅう掃除当番がまわってくる気がするなあ」
デクスは歌うように言い、そのままアリスの脇を通り抜けてから、立ち止まった。
「やあ、アリス」
振り返った顔が上気しているのは、温まった風呂場で働いていたからだろう。
「ひとりでどうしたの？」
首をかしげると、紫色の髪から、雫(しずく)がぼたぼたと垂れた。
「……なんでもない」
「こんなにいい匂いがしてるのに食堂に行かないの？」
「あ……」
言われて初めて、アリスは料理の匂いが漂っていることに気づいたが、少しも食欲を感じない。
「ぼくを待ってたとか？」
「ちがう」
言下に否定され、デクスはちょっと複雑な顔になった。
「まあいいや。一緒に行こうよ」

「……」
アリスは一瞬、このまま部屋に引き上げてしまいたい気持ちになる。だが、二段ベッドの並んだあの部屋にいてもやがてケイティたちは戻ってくるのだから、結局は同じことだった。
「おなかでも痛いの？」
しゃがみ込んだデクスに顔を覗き込まれ、アリスは首を振る。
「じゃあ、ちゃんと食べなきゃ。アリスはかわいいんだから、ごはん食べてもっとかわいくならなきゃね」
にっこり笑うと、デクスはアリスのか細い手首を握った。
「はなして」
とっさに、アリスはその手を振り払う。
「アリス？」
「……ぬれてて気持ち悪い」
えっ、と広げた手のひらに、髪の毛から雫が落ちた。
「ごめんよ。なんかいろいろ拭き忘れてる。とにかく行こう」
（お風呂場にいたから、私のこと知らないんだ）

アリスは仕方なくデクスのあとについて歩き出しながら、
（どうせもう私とは話もしなくなるに決まってる……）
湿った手首を服にごしごしと擦りつけた。

第二章

アリスは、ハーフエルフと知られた日から孤立した毎日を送るようになった。
孤児院で暮らす子供たちには行き場がない。働ける年齢になるまで院を出て外で暮らすことは禁じられていたし――幸運にもどこかの家に引き取られるという夢のような出来事は、めったに起きなかった。エイリーン夫人が、引き取り先で孤児が労働力として使われることをなにより恐れていたせいもある――、せいぜいハイマの村の中を散歩するくらいが彼らに許された行動範囲だった。
村に出れば、嫌でも人々に目が行く。つましい生活を送っているありきたりな家族の姿でさえ、口には出さなくても孤児たちにとっては辛いものだった。
加えて、村に集まってくる冒険者たちの自由な姿は、特に男の子たちの羨望の的だった。
外に出た子供たちはもやもやした気持ちを持ち帰り、そのせいでよくケンカをする。孤児院で暮らし、孤児というレッテルを貼り続けられているうちは、仕方のないことかもしれなかった。
そこへ現れたアリスは、だから、かっこうの捌け口だったのだろう。不自由で非力な子供たちがいじめる対象としては、ハーフエルフであるという事実は充分すぎるほどの大義名分だった。

ただし、実際に手を下せば報復が怖い。彼らはできるだけアリスを遠巻きにし、仲間はずれにするというやり方を選んだのだった。

消極的ないじめだったので、院長はもちろんのこと、子供たちの世話をするためにやって来る村の大人たちもいつしかそれを黙認するようになっていった。ときおりやって来るエイリーンでさえ、まるでアリスなど見えないかのように振る舞うことがあった。

そんなときアリスは怒り出すでもなく、じっと黙っていることが多かったが、実はその可憐な容姿に似つかわしくない成熟した思考で、逆に彼らをじっと観察していた。

「ア〜リス」

昼食後、中庭に転がっていた木箱に腰かけて本を読んでいたアリスは、スキップしながらやって来たデクスに、目だけ上げて応える。

彼女は七歳、デクスは十三歳になっていた。

「……」

「いたいた、アリス」

この孤児院でアリスに対する態度を変えないのは、彼ひとりだ。もっとも最初の一年ほど、デクスはアリスがハーフエルフだということを理解していなかったらしい。何度も聞いていたはずなのだが、それはいつもぼんやりした彼の耳を素通りしていたのだろう。ようやく認識したところで、なぜハーフエルフを差別しなければならないのか、わかっていない様子だった。

デクスはここ数年でぐんと背が伸び、声もすっかり低くなった。が、相変わらず他の孤児たちから軽んじられている。

「ここだと思ったよ。今日ぼくたち、卵売り（たまごう）当番だよ」

それを聞いて、アリスは軽いため息をつく。

「この間、行ったばかりじゃない」

「そうだっけ？　でもみんな昼寝しちゃったし」

デクスはよく晴れた空を見上げ、大きなあくびをした。今日は風も穏やかだ。

「あーあ、ぼくも眠いや。でもアリスと一緒に出かけられるならいいよ」

「デクス」

アリスはぱたんと本を閉じると、
「そんなこと言ってるからジャグたちにバカにされて、当番ばっかり押し付けられるのよ」
と、デクスを軽く睨(にら)む。
「当番はみんな平等にやりましょうって言われてるのに」
「平等だって？」
デクスが珍しく複雑な表情で聞き返した。
「そんなの無理だよ。ぼくはみんなとは違う……」
「どう違うっていうの」
(普通の人間のくせに)
アリスは、その場に突っ立っているデクスをちらりと見上げた。
「ぼくが捨て子だったたっていうのは知ってるよね？」
「ええ、何度も聞いたわ」
「院長先生もおばさんも、本当のことを教えてくれないんだけど……」
デクスは相変わらずエイリーンの名前を覚えられないのか、おばさん呼ばわりしながらその場に座り込む。

「ここだけの話だけどね、実はぼく」
彼はあたりを見回すと、声をひそめた。
「捨て子じゃなくてエサだったらしいんだ」
「なにそれ」
アリスはぽかんと口をあけてしまう。
「だからさ、両親が赤ん坊のぼくを育てられなくなって仕方なく捨てたんじゃなくて、魔物退治のときに魔物のやつらをおびき寄せるためのエサとして使ったってこと」
「本当なの？　じゃあデクスのパパとママはどうしたの？」
「魔物がぼくに惹かれてわさわさ集まってきたんで、逃げちゃったらしいんだよ」
「そんな……」
アリスは呆れてまじまじとデクスの顔を見てしまった。やはり大真面目だ。
「誰に聞いたのよそんな話」
「ベンだよ。ベンは嘘つかないだろ？」
アリスは小太りの少年の顔を思い浮かべ、曖昧に頷いた。
「ベンはどうして知ってたの」
「スカイに聞いたんだって。スカイはきっと院長先生たちに聞いたんだ」

「ばかばかしい」

アリスはうんざりして立ち上がった。いかにも子供の考えそうな法螺話(ほらばなし)ではないか。ベンはジャグほどそうべったりではないが、やはりスカイの取り巻きのひとりだった。

「どうして、そうすぐに担(かつ)がれちゃうのかしら。だいたい捨てるいきさつがそこまで人に知られてたら、捨て子もなにもできないじゃない」

「でも、先生たちも違うとは言わないんだよなぁ」

(それは、あきれてるからでしょ)

アリスは、だんだん腹が立ってきた。

(デクスがいじめられてるのは私と喋(しゃべ)ったりしているせいだと思って、ちょっと気にしてたのに……。私がいなくたって同じだわ)

「デクスは、捨て子でエサだったから損な役回りを押し付けられても仕方ないと思ってるのね。おかしなこと言われたら、殴ってやればいいのに」

うわあ怖いなあ、とデクスが肩をすくめた。

「そんなことしたら、みんなに仕返しされちゃうじゃないか」

「……」

アリスは黙って目を伏せ、卵が置いてあるはずの台所へと歩き出す。

（不公平なことばっかり）
平等な扱いなどこの世界では望めないのだ、とアリスは思った。
（だったら、どうしたらいい？）
デクスの足音は聞こえない。
（――ちから）
ふいにアリスの頭に閃いたのは〝力〟という言葉だった。
たとえ十歳に満たない子供でも、忌み嫌われる出自でも、力さえあれば――。
「ねえ、早く行きましょ」
アリスは振り返ると、まだ恐ろしそうに顔をしかめているデクスを促した。

村の食料品店へと続く分かれ道まで来ると、
「デクス、ここからはひとりで行って来て」
アリスは立ち止まる。
「私、足が痛くなっちゃった」

「大丈夫かい？　アリス。おんぶしてあげようか」

「いやよ。ここで待ってる」

卵の籠(かご)を抱えたデクスをひとりで行かせてしまうと、アリスはあたりをぶらつき始めた。ひとりで考えてみたかったのだ。デクスが帰ってくるまでに戻っていればいい。

(力……。どうしら私は強くなれるのかしら)

何度も通ったことのある村の道だった。宿屋や店のある一角とは反対の方角なので、いつもひっそりとしている。

「あ……」

赤土(あかつち)に根を張った草が白い花をつけ、緩(おだ)やかに揺れていた。思わず近寄ろうとしたアリスは、ハッとなった。

あのとき、アスカードの岩場に咲いていた花に似ている――両親の血を浴びて、赤く染まっていたあの花たち。

(父さんも母さんも弱かった。弱かったから殺されたんだわ。もっと力があればあんなことにはならなかったのに)

静かな怒りがアリスの胸で渦巻き始めた。

と、すぐ目の前の民家から、小さな咳(しわぶき)が聞こえた。見ると、玄関の前にひとりの老婆

が座っている。アリスはこれまでにも何度か彼女を見かけたことがあった。いつも同じ場所に座っているからだ。
アリスは特別気にかけもせず、民家の前を通り過ぎようとした。すると、
「今日はひとりかい」
突然、老婆が皺（しわ）だらけの口元を動かした。アリスはその声に驚いて振り返ったが、彼女は前を向いたままだ。目が悪いのだろう、とアリスは思った。
「……私を知ってるの？」
「知ってるともさ。ハーフエルフだろ」
「！」
老婆の声は低く、嗄（しわが）れていた。
「あたしにも昔、ハーフエルフの友だちがいたのさ。だから気配でわかるんだよ。あんた、孤児院にいる娘だね」
「……そうだけど」
アリスは老婆が少しも自分のほうを向こうとしないことに気味の悪さを覚えたが、
「おばあさんのお友だちはいまどうしてるの？」
と訊ねた。

「さあね。あたしの先はもう短いが、ハーフエルフは何百年も生きるんだ。広い世界のどこかで、ピンピンしてるだろうよ。あんたもそう……途中で死ななけりゃ、長生きするね」

「おばあさん、その人、そのお友だちは」

「強かったとも」

最後まで聞かずに老婆は答え、ぎょろりと白く濁(にご)った目を剝(む)く。そしてアリスを横目で見た。まるでアリスが何を聞きたがっているのか、知っていたようだった。

「力は血から。だから濁りがあってはいかんと、人間はあんたたちを虐(しいた)げる。血が呪われているとね。あんたが力をより強く求めるのはそのせいだよ」

「……」

「ああ、卵が食べたいねぇ。孤児院の卵は昔食べたことがあるが、うまかった」

「……今度、持ってきてあげるわ」

アリスは自分の声が震えているのを感じた。

「急いでおくれ。死んでしまったら食べられないからねえ」

そのとき、分かれ道の方からデクスの呼ぶ声が聞こえてきた。アリスは挨拶(あいさつ)もそこそこに走り出した。

（ハーフエルフは何百年も……広い世界で……強かった……強かったとも）

頭の中で、老婆の言葉を反芻（はんすう）する。それにしてもなぜ彼女はアリスの心がわかったのだろう？

（偶然よね）

アリスはきょろきょろしている少年に声をかけた。

「デクス」

「アリス！　どこに行ってたんだい。足は大丈夫？」

「そんなことより」

アリスは息を弾（はず）ませながら、デクスの前に手を突き出した。

「卵のお金を出して。デクスったらこの間、道にばらまいちゃったでしょう？　今日から私が持って帰るわ」

「いいよ」

デクスはにこにこしながら、硬貨の入った巾着袋（きんちゃくぶくろ）をアリスの小さな手のひらに載せてやる。

「それから、今度卵売りの当番を押し付けられても断らなくていいからね」

なーんだ、とデクスは孤児院に向かって戻り始める。

「やっぱりアリスはぼくと一緒にいたいんだな」
ちがう、とアリスは思ったが口には出さなかった。

冒険者たちが魔物を倒すところを見たのは、それからしばらくあとのことだった。
デクスとアリスが卵売りのために孤児院を出て間もなく、風の音に乗って低い唸り声と、男たちの怒号（どごう）が流れてきた。
「……魔物？」
アリスが耳をそばだてると、デクスはすぐに顔色を変え、
「ヤバいよ。いったん帰ろう」
と言い出した。孤児院の約束事でも、外で危険に遭遇したらすぐに戻らなければいれないことになっている。
「あら、平気よ。魔物なんか中庭にも入ってきたことあるじゃない」

「アリス……あ、待ってよ！」
デクスは小走りに先を急ぐアリスのあとを追いかけ始めた。
ほどなくふたりの前に視界が開けたとき、既に魔物は三体地面に倒れていた。たいして大きくはないが、丸腰のときに襲われたらひとたまりもないだろう。
冒険者は全部で三人おり、それぞれが武器を手にしている。いちばん体格のいい男がまさに今、最後の一体にとどめを刺すところだった。
「さあ、これで地獄へ行きやがれっ！」
男が太い剣を突き刺すと、魔物は痙攣（けいれん）しながら絶命した。
「いち、に、さん……すごい。四匹も倒したんだ」
デクスが目を丸くして感心していると、男のひとりが彼らに気づき、薄く笑う。
「ずっとそこで見てたのか？」
「いや、いま来たところです。えっと、最後のが死ぬ前」
律儀にデクスは応えた。
「そうか。今日はなんだか風が変な具合だ。早くうちに帰りな」
男の言葉に、アリスは宙を見上げて首をかしげる。
「どこが変なの？」

「ははは、子供にゃわかんねえよ。なあ」
ああ、と別の男が頷いた。
「俺たちも今日は宿に引き上げるとしようぜ」
冒険者たちはそれきりアリスたちにかまうこともせず、声高に話しながら行ってしまった。
「……カッコいいなあ、怖かったけど」
デクスが、ふうっと長い息をつく。
「強いのは、いいわね」
アリスの言葉をどう受け取ったのか、デクスは、
「じゃあぼく、大人になったらでっかい剣を買うよ」
と、目を輝かせた。
分かれ道まで来ると、アリスは再び立ち止まる。宿へ続く道を覗き込んでも冒険者たちの姿はもう見えなかった。
「デクス、ひとりで行ってきて」
「え、また足が痛いのかい？」
「いいから」

「……わかったよ」
デクスは心配そうに何度もアリスを振り返りながら歩いてゆく。その背中が買い物に行くらしい村人たちの中にようやく紛れてしまうと、アリスは先日の民家へ向かった。後ろから強い風が吹いきて、アリスの髪を揺らす。肩を押されるようにして、アリスの足は速まった。
老婆は、いた。相変わらず玄関の前に腰かけ、まっすぐ前方を向いている。
「おばあさん」
「おや、来たね」
ええ、とアリスは頷く。そして、服の下に忍ばせてきた卵を三つ、老婆に持たせてやった。
「これは売り物だろう」
「いいのよ。約束したでしょ、持ってくるって」
「うれしいね」
老婆は卵をふたつ自分の脇へそっと置くと、残りのひとつをコツコツと指先で叩いた。そして器用に小さな穴をあけると、中身を吸い始める。
「おいしいねえ。これでもう思い残すことはないよ」

「そんなこと言わないで」

アリスはぎこちなく笑ってみせた。

「……グエンドさまに……繋ぎがつかん」

「え？」

「少し……遅れるかもしれん……」

「おばあさん？　なぁに？　何て言ったの？」

アリスは老婆の方へ顔を寄せた。どうやらひとりごとらしい。皺だらけの唇は盛んに動いているが、声が籠（こも）っていてよく聞き取れなかった。

ふと思い出したように老婆は顔をあげ、今度ははっきりと訊ねる。

「あんた、名前は？」

「……アリス」

「そうかい。アリスね。あんたは強くなるよ」

老婆はまた俯（うつむ）くと、ふたつ目の卵に穴を開け始めた。

「あのね、おばあさん。私、いろいろ聞きたいことがあるの。この間言ってたお友だちのことよ」

「……誰だって？」

「ハーフエルフのお友だちがいるって言ってたでしょ？」
「そうだったかねえ」
老婆はそのまま卵を吸いだした。
（もう、なによ。とぼけちゃって）
アリスがむっとしたとき、後ろからぽんと肩を叩かれた。
「アリス」
「えっ⁉」
いつの間にか、デクスが背後に立っていた。
「あそこにいないから探しに来ちゃったよ。どうかしたの？」
デクスは座り込んでいる老婆を見て、訊ねた。
「なんでもないわ。卵を食べさせてあげてただけよ」
「優しいなあ、アリスは」
デクスは唸るように言い、
「よかったね、おばあちゃん」
と声をかける。
「……」

老婆は顔もあげなかった。
「行きましょ。少し頭がおかしいのよ」
アリスはぷいと顔を背けると、デクスの先に立ってもと来た道を戻り始めた。
「ねえアリス。こないだも言おうと思ってたんだけど……」
追いついたデクスが口を開く。
「そんなに気にする必要ないんじゃないのかな……あの店にいるのはいい人ばっかりだし、アリスが今みたいに優しいってことがわかればきっとみんなも……」
「気にする？」
アリスは聞きとがめてデクスを見上げた。
「誰が気にしてるっていうの？　この間だって、私は用事があったから店に行かなかっただけよ」
「そ、そうなのかい？」
差別に負けたかのように言われたことが腹立たしい。
アリスは道端（みちばた）の白い花に目をやった。もう大方花びらを落としてしまっている。
「優しさなんて、弱いのといっしょ。つけこまれるだけよ。あんたみたいにね」
「えへ。アリス……ぼく、やっぱりそんなに優しいかなあ」

「もう！　ちがうったら。なんで笑うのよ！」

アリスは、にやにやしながらうれしそうに頭を掻(か)いているデクスを上目遣(うわめづか)いに睨みつけた。

それから何か月かの間、アリスは老婆の家へは行かなかった。久しぶりに訪ねてみると、あの玄関にはもう誰の姿もなかった。

あとでデクスが村人に聞いてきたところによれば、彼女は亡くなったのだという。アリスが卵を持って行ってから間もなくのことだったらしい。

やがて老婆はアリスの記憶の片隅へと追いやられてしまった。

子供たちの拍手は、食堂から廊下まで響き渡った。

孤児院の厨房(ちゅうぼう)で特別料理を作るのに余念がない村人たちや、中庭で大工仕事をしてくれている冒険者の男の耳にもそれは届いていただろう。

「はい、それではケイティ、ローズ、そしてベン。入ってきてちょうだい」
院長夫人のエイリーンが声を張ると、三人は拍手のなか、面映そうな表情を浮かべて食堂に入って来た。そして、にわか拵えの舞台に並んだ。
この春、彼らは孤児院を出て外で暮らし始めることになった。働き口が見つかったのだ。
子供たちが旅立つとき、院ではささやかなお祝い――院長は面倒なことが嫌いなので、エイリーンの都合がつく場合に限りという条件つきだったが――をする。
「エイリーン先生、張り切ってるよな。三人とも、先生の知り合いのところで働くらしいよ」
バーニィが隣にいたデクスに囁いた。
テレサと数年前に入って来た小さな子供たちが、ケイティたちに質素だがきちんとリボンをかけた花束を渡す。アリスはそれを無表情に眺めていた。
「順番から言ったら、次はぼくとバーニィかなあ。もう十六だもんね」
デクスがにこにこしながら花束を受け取る格好をする。
「おまえはどうかな。どこにも推薦して貰えないんじゃね？」
バーニィはバカにしたように言い、

「いや、それより年齢的にはスカイたちの方がちょっと上だろ」
と、唇の端で笑った。
「あいつ、最近苛立ってると思わないか？」
「……さあ」
デクスは首を傾げた。
そうかもしれない、とアリスは密かに思う。
昨日もアリスの顔を見るなり突然、「おい、みんな気をつけろよ！　こいつ、牧場に俺たち人間を売る手引きをしてるんだぜ」と叫び出し、窓ガラスを叩き割ったばかりだった。
アリス自身はそんなことには慣れっこだが、小さい子供たちの中には怯えて泣き出す者もいた。
「スカイのやつ、やっと気がついたんだよ。みんなが出て行っても、自分はここに永久に残らなきゃいけないってことに。なにしろこの孤児院の跡継ぎだからな」
「そうかあ」
デクスはうんうんと頷いている。
アリスはそっとスカイの様子を窺（うかが）った。なるほど、ジャグと一緒に椅子にそっくり返

り、仏頂面をしている。ふたりとも体が大きいので、余計ふてぶてしく見えた。
(ジャグは無事にここを出られるのかしら……)
アリスは考えた。もし彼がスカイより力を持てばそれは可能だろう。だが、そうでなかったら、飼い殺しにされることを覚悟しなくてはならない。
(私は?)
アリスが自問したとき、歌が始まった。みんなが今日のために練習していたのは知っていたが、アリスは一度も行かなかった。呼ばれなかったからだ。
(私は……、ここを出て行くわ)
やがて歌が終わったとき、スカイががたんと音を立てて椅子から立ち上がった。その表情から、彼がひどく腹をたてているのがわかった。
まっすぐにデクスの方へ歩いて来る。みんな何事かと固唾を飲んでふたりを見つめた。
「おまえ、さっきからなにをにやにやしてるんだよ」
「え、ぼく?」
デクスは座ったまま、驚いてスカイを見上げる。
「俺のこと笑ってたのか」
「知らないよ……」

「笑ってた笑ってた」
最近よくスカイと一緒にいる男の子がはやしたてる。
デクスは困ってバーニィに助けを求める視線を投げた。が、バーニィは知らん顔を決め込んでいる。
「もし笑ってたなら、パーティーが楽しいからだと思うけど」
「ウソつけ！」
スカイはカッとなって拳を振り上げた。
「おやめなさい！」
エイリーンが叫ぶ。それと同時に食堂のドアが開いた。スカイは、さっと腕を下ろす。
「やあ、今日はお祝いなんだって？　盛り上がってるかい？」
中庭で作業していた冒険者の男だった。明るい茶色の髪を短く刈り込んでいる。手にハンマーを持ち、日に焼けた浅黒い顔には人のよさそうな笑みを浮かべていた。
「院長、柵の修理が終わったよ」
「それはどうも」
食堂の隅に座っていた院長は、中腰になって礼を述べた。
「なあに、この前を通りかかったときに壊れてるのが目についたからさ。ものはついで

だ、他に直して欲しいとこはないかい？」
　すると、子供たちが何人か手を上げた。
「はい！　厨房のドアのたてつけがわるいです！」
「ベッドのはしごが折れたまんま！」
「あたしたち、この間、屋根を直したよ。風でめくれちゃったの」
「床が抜けそう」
「スカイが割った廊下の窓ガラスのとこが寒い！」
　どっと笑い声が起こる。みんなに笑われ、スカイはむっとしたまま自分の席に戻った。デクスとバーニィは安堵（あんど）の息を吐く。
「そんなにあちこち壊れてるのかい？　こりゃひとりじゃ大変だなあ」
　男はちょっと考え、
「院長。あと二日もすると仲間たちがハイマ入りする。それからでよければ一緒にまた来るよ。俺のは見よう見真似（みまね）だが、本物の大工をやってたっていうやつがいるんだ。どうかな」
　と提案した。
「まあ、それは願ったり叶ったりですわ。本当に助かります」

エイリーンが夫を差し置いて返事をすると、男は「じゃあまた」と出て行った。
入れ替わりのように、湯気をたてている食事が運び込まれてきた。ずいぶんと食料品の寄付があったに違いない。歓声のなか、ケイティたちは涙ぐみながら何度も村人に礼を言っている。
（バッカみたい。そんなにありがたいなら、ずっとここにいればいいじゃない）
アリスはなんの感慨（かんがい）もなく焼きたてのパンを手をとった。

約束通り男たちがやってきたのは、それから四日後の午後早くのことだった。
ケイティたちはエイリーンに連れられ、すでに孤児院を出ていた。
「おい、デクス」
昼食後の自由時間に自分のベッド――いちばん日当たりの悪い場所にある二段ベッドの下段――でぼんやりしていたデクスは、

「なに？」
と、声のする方を見た。ジャグが屈み込み、手招きしている。
「ちょっと来いよ」
「うん」
昼寝をしている小さな子たちを起こさないように、デクスはジャグについてそっと廊下へ出た。
女の子たちの寝室から、釘を打つ音が聞こえてくる。はしごを直しているのだろう。
「院長が、もう少ししたらあの人たちにお茶を出してやってくれって」
「いいよ。何人来てるんだっけ」
デクスは厨房のカップがしまってある棚を思い浮かべながら訊いた。
「三人。いま別々のところで作業してるから、風呂場の横の部屋にまとめて置いとけばいい」
「わかった」
あそこでお茶を飲むんだなと思いながら、デクスは頷く。
頼んだぜ、とジャグは廊下を歩いて行った。
火を熾し、湯を沸かして大きなポットにお茶を作る。もう少ししたら夕飯を作りにや

って来るはずの村人たちのために、火は落とさないでおいた。
ポットと三人分のカップをトレイに載せ、小部屋へ運ぶ。普段は主として女の子たちが身繕いに使っている部屋だ。
ドアを開けると、革袋や大きな紙包みなど、男たちの荷物が床に置いてあるのが見えた。控え室として使ってもらっているのだろう。
簡素なテーブルの上にトレイを置くと、デクスはすぐに踵を返した。そのとたん、何かに躓きそうになる。
「うわ」
男たちの荷物だった。デクスはなんとか踏みとどまったが、体のバランスを崩した斜めの姿勢のまま、廊下へ出た。
「おっとっと」
ちょうどそこを通りかかったスカイが、
「おい、なにやってるんだ」
嫌そうにデクスを見ると足を止める。
「お客さんのお茶を持ってきたんだよ」
ああ、とスカイは納得し、

「それ、俺が親父に頼まれたんだ。やってられっかよ、なあ」
と、デクスの肩を思い切り押した。鈍い音と共に、紫色の頭が壁に激突する。
「……うっ！」
「おいおい、気をつけろよ」
スカイは笑い、小部屋を覗き込んでいたと思うと、ばたばたと廊下を走って行った。
「いてて……」
デクスがようやく体を起こしてみると、目の前が赤い。額が切れ、壁に赤い染みができていた。
「まいったなあ」
くらくらしながらデクスは部屋へ戻る。ベッドにうずくまってタオルで傷口を押さえているうち、少し眠ってしまったようだった。
やがて、誰かの話し声で目がさめた。
「本当にありがとうございました。いつハイマをお発ちで？」
院長のようだ。
「こんな村ですが、とってもいい酒場があるんですよ。なんなら私の名前を出していただいて——」

いつになく饒舌な院長に、男たちがなにか応えている。
カップをさげて洗っておかなきゃ、とデクスはあわてて起き上がった。傷はまだズキズキと疼いている。これ以上乱暴されるのはごめんだった。

その夜、ハイマの村には強風が吹き荒れた。珍しいことではなかったけれど、アリスはいつになく眠れず、こっそり部屋を抜け出した。
がらんとした食堂に入り、水差しに残っていた水を飲む。
(なんだか落ちつかない……)
アリスはコップをテーブルに置くと、底に少し残った水がランプの明かりに照らされるのを見つめた。
「あ……」
ふいに、体の奥に不思議な感覚が生まれた。

(なに、これ……)
それは遙か奥底から出口を求めて湧き上がってくる、ひと筋の力の連なりだった。ずっと昔からアリスの中にあったにもかかわらず、今までずっと鳴りを潜めていた本当の自分――。
聞いたこともない言葉が唇から漏れる。魔術の詠唱は渦を巻きながらアリスの体を貫き、彼女の指先に力を集めた。
パリ―――――ンッ!!
放たれた力はコップを割り、残っていた液体が文字通りの呼び水となる。
「きゃあっ」
現れた水の柱は、だが、食堂の天井にようやく届くくらいの高さしか持たなかった。と、驚いたことに、水柱のまわりにもやもやした煙のようなものが立ち込め始めた。
(なにこれ……)
アリスは思わず後ずさる。
突然、
――待っていた!
大音量の声が響き渡った。

「!?」
　――力の発露(はつろ)は我とおまえをつなぐもの……。
「誰っ!?」
　思わず叫んだときだった。
　台所のドアがガタガタと音を立てて開いた。
「！」
　アリスは思わず身を低くし、テーブルの下に潜り込む。
「早くしろ！」
　押し殺した声に、アリスはハッとなる。
(院長？　こんな時間に)
「ちゃんと……見つからないように……」
「大丈夫……ここになければ……」
　途切れ途切れの言葉が聞こえてくる。
　三人、いや四人かもしれない。彼らは食堂に入ってくることなく、廊下の方へ抜けて行き、やがて静かになった。
　アリスは充分に時間を置いてテーブルの下から這い出ると、素早くあたりの様子を窺

う。もやもやした煙も、水の柱も消えていた。

（なんだったのかしら……）

あたりに散乱しているコップの破片を、夢ではなかったのだと思いながら片付けてしまうと、アリスはそっと部屋に戻った。

さっきのは魔術だった、と毛布に包まりながら彼女は考えた。

（せめて、死んだ母さんくらいうまく使えるようになれば……私は不幸じゃなくなるわ、きっと）

それにしてもあの気味の悪い声の主は誰だったのだろう。

（わからない……。でも今日はもう、疲れた……）

アリスはすぐに眠りに落ちた。

風は朝まで吹き荒れていた。

　短髪の冒険者がやって来たとき、孤児院の食堂では朝食の真っ最中だった。昨日一緒だった男も隣にいる。
「どうかしましたか？」
　薄いコーヒーを飲んでいた院長が椅子から立ち上がった。
「殺された」
「……は？」
「死体が見つかったんだよ、この近くの崖下から、今さっき」
　怒りを押し殺した声で言い、短髪の男は子供たちをぐるりと睨め回した。思いもよらない展開に、みんな体を固くしている。
「ええと、それはどういうことですかな」
　院長はゆっくりと男たちに歩み寄った。
「昨日、もうひとりいただろう？　俺の仲間が」
　ええ、と院長は頷く。
「確か、もとは大工をしていたとかいう」
「そうだ。昨夜ひとりで酒場に出かけたまま、宿に戻らなかった。あんたが教えてくれた酒場だよ」

院長の顔が、すっと青ざめた。
「そう言われましても……私は、いい店を紹介しただけで」
「それはわかってるさ」
それまで黙っていたもうひとりの冒険者が言った。
「魔物に襲われちゃったんじゃないのかな」
子供たちの中から声があがる。
「なら、諦めもつくんだが」
短髪の男はため息をついた。
「荷物の中から金がなくなってるんだ。あいつ、今日にはここを発って故郷に帰ることになってた。たんまり稼いで、金や宝石を持ってたんだよ。魔物が金目のものを盗って行くか？」
「それは、まことにお気の毒でした」
院長はようやく大人らしい言葉を口にするが、男の耳には入らないらしい。
「あいつは用心深くてね。金品は肌身離さず持ってるタイプさ。だから、傍からはそうそうは高価なものを持ってるってわからないはずなんだ」
「何が言いたいんだよ」

スカイがガタンと椅子を鳴らした。ジャグも立ち上がる。
「俺たちがやったっていうのか？　孤児だからってバカにすんなよ！」
「そうだそうだ！」
スカイの取り巻きたちは口々に不満を示した。
「……いや」
男は一瞬、顔を歪め、
「すまん、そうは言ってない。ただ、あいつは昨日ここに来て、床を直していただろう？　その間は荷物をここに置いていたものだから、何か知らないかと思って」
ふん、とスカイが鼻を鳴らした。
「結局疑ってんじゃねーか。第一ここを出るときには金はまだあったんだろう？　あんたたちの荷物なんかに興味ねえよ。興味のありそうなヤツって言ったら……そうだな」
彼はゆっくりと子供たちを見回す。
「おまえくらいか」
「えっ⁉　ぼく⁉」
飛び上がったのは額に絆創膏を貼ったデクスだった。
（まさか……）

成り行きを見つめていたアリスも驚いた。
「な、なんでぼくが」
デクスは青くなって、
「知らないよ」
とぶるぶる首を振る。
「そういえばデクスおまえ、この人たちが使ってた部屋から大慌てで出てきたよな。こんなんなって、斜めにつんのめっちゃって」
「本当か」
冒険者たちの顔色が変わった。
「それは、ぼくがお茶を持って行ったときに躓きそうになったから……革袋とかでっかい紙の包みとか……」
「あいつの荷物だ」
短髪の男が低く言う。
「ええっ⁉」
「昨日、中に金を入れてたかどうかはわからんが……」
「そんな……」

デクスは頭を抱えて身を捩(よじ)った。
「ちょっと待ってください」
院長が口を挟む。
「お茶は、私が息子に持って行くように言ったのですが」
「俺は用事があったんだ。だからジャグに頼んだんだよ」
スカイはジャグを横目で見た。
「だって、お、俺がお茶を運ぼうとしてたら、デクスのやつがどうしても自分が持って行きたいっていうから……」
「そんなあ！　ぼくはジャグに頼まれたんだよ」
デクスは涙目になりながら訴えたが、旗色は完全に悪かった。
「おまえ、デクスっていうのか」
短髪の男がデクスに近づいた。
「ケガをしてるな。どうしたんだ」
デクスは絆創膏を押さえ、
「こ、これは、きのう、廊下の壁にぶつけたんです……」
と、蚊の鳴くような声で答える。

「ほう、ずいぶんとまぬけなんだな。本当は、俺の仲間と争ったせいじゃないのか？」
男は首を巡らせ、
「院長。この子を借りて行ってもいいかな？　宿で話を聞きたいんだ」
有無を言わさぬ調子で院長に言った。
「え、ええ……それは……」
「待って！」
アリスは思わず叫んだ。そして自分でもびっくりしてしまった。
「何かな、お嬢ちゃん」
男が訊ねる。子供たちの視線が自分に集まっているのを感じながら、
「……デクスは、泥棒なんか……しません」
アリスはやっとそれだけ口にする。
「黙れ、この嘘つきハーフエルフ女が！」
スカイが吐き捨てると、男たちはハッとなった。
「嘘じゃないわ。デクスは人を殺したりしない。できるわけ、ないもの。だって……」
「……」
なおもアリスが続けようとするのを悟って、男は態度を軟化させる。

「……まあ、いろいろ事情があるんだろう。院長、明日また来る。それまでにはっきりさせておいてくれないか」
「わかりました」
院長が短く答えると、男たちは出て行った。
「アリス……ありがとう」
涙を拭いながら礼を言うデクスに、つかつかとジャグが近づく。
「デレデレしてんじゃねぇ！」
「く、苦しい……」
襟首を締め上げられ、デクスが唸る。ジャグの前に、アリスは飛び出した。
「やめてっ！　きゃ！」
いつの間にかそばに来ていたスカイに手首を掴まれる。
「痛い……」
ふと、視界の隅にバーニィの顔が見えた。が、目が合った瞬間、彼は横を向いてしまった。
「余計なことしやがって」
「！」

アリスは、込み上げてくる怒りに我を忘れそうになった。何に対する怒りなのかもわからない。
スカイをぐっと睨みつける。
(力があれば……魔術がちゃんと使えれば……!)
集中しようと思うのだが、スカイに体を揺さぶられる痛みに、それもできなかった。
「わ……私、知ってるんだから……ゆうべ……」
そのときスカイの目に走った動揺を、アリスは見逃さなかった。
「ゆうべ遅く……きゃあっ!」
目の前がまっ白になる。頬を殴られ、アリスの軽い体は吹き飛んだ。

「アリス……アリス」
気がつくと、アリスは食堂の床に寝かされていた。
「デクス……」
アリスは心配そうに覗き込んでいるデクスの手につかまって、体を起こした。院長も、子供たちも誰もいない。食事の途中でみな引き上げてしまったらしい。

「大丈夫かい？」
「ええ」
アリスは立ち上がると、手早く服を整えた。
「ケガはない？」
「平気だったら。他人の心配してる場合じゃないでしょ」
自分でもぞっとするほど冷たい声だった。
「アリス……」
やりきれない気持ちで、アリスはひとり食堂を後にした。
そのまま部屋へは戻らず、風呂場の横の小部屋へ行ってみる。ドアを開けてみたが、男たちの荷物はもちろんなかった。それからアリスはふと、廊下の壁についている血の染みに目を止めた。
（デクスのかしら。どうせスカイたちにやられたに決まってる）
アリスは唇を噛みしめた。
（弱いのは大嫌いだと思ってた……父さんも母さんも、力がないから殺されたんだ、悪いのはあのふたり自身だ、って。でも、もし私に力があったら？　私がふたりを救えたのかもしれない。あんなスカイなんかより弱いなんて私は……私は……！）

——力を手に入れるためなら、どんなことだってする！
アリスは稲妻（いなずま）のように体を貫く自分の言葉を、何度も何度も反芻した。

深夜。
アリスはどことも知れない暗闇の中にいた。
——昨夜は邪魔が入った。
あの声が響いた。
「あなた……、誰？」
アリスは声の聞こえてくるほうに向かって問いかける。
——我が名はグエンド。次なる魔界の王リビングアーマー様の忠実なる下僕（しもべ）。
「グエンド……魔界……？」
アリスは闇に目を凝らした。聞き覚えのある名前のような気もするが、思い出せない。



——アリス。
名前を呼ばれて、アリスはどきりとする。
——アリスよ、おまえの欲する力を与えよう。契約を。
「契約って……どういうこと？」
何かが自分の周りに漂っていることを、ようやくアリスは認識する。闇の中に闇が漂っているのだった。
——リビングアーマー様が憎きミトスによって封印されし書物……人間たちから禁書と呼ばれる本を探し、我が主(あるじ)の解放と復活を……。
(魔族を封印した……禁書ですって？)
そんな本が世界のどこかにあるのだろうか。
「それを探すかわりに、私に力をくれるっていうのね。その力っていうのは、強いんでしょうね」
——試すがよい。魔族の力を。
「……」
アリスはほんの少し、どうするべきか迷った。だが、魔族の〝力〟の誘惑には勝てそうにない。

「……わかったわ、契約する。そのかわり、たいしたことなかったら約束はなしよ」
――承知。
次の瞬間、黒々と渦を巻く何物かがアリスを捉え、消える。アリスは渦の中に異形の魔族の後ろ姿を見た気がした。

ハイマの村の宿から冒険者の男たちがやって来たのは、翌日の昼前だった。話を聞いた者たちも一緒に来たのだろう、全部で七、八人もいた。
「さあ院長。昨日の話はどうなったかな」
短髪の男は、昨日よりさらに殺気立っている。
応対に出た院長によって、子供たちも玄関近くに集められた。アリスもデクスも廊下に並んだ。
「それが……」

言いにくいのですが、と院長は切り出す。
「やはりデクス以外には考えられんのです」
「ええっ!?」
デクスが再び飛び上がる。
「ですが本人は口を割りません。今日は、彼をそちらに連れて行っていただいてかまいません」
「ちょっと……どうして……ぼくは何も……！」
男たちの腕が伸び、デクスはあっさり引きずり出された。
「この野郎！　なんで殺した！」
「金はどこへやったんだ!?」
「子供のくせに……宝石をどこで換金するつもりだ！」
男たちは口々に怒鳴りながらデクスを小突きまわし、彼が倒れると鉄の入った頑丈(がんじょう)な靴で蹴りを入れた。その度にデクスの口から悲鳴が漏れる。
「助けて！　ぼくじゃない！　ぼくは知らない！」
必死で助けを求めるデクスに手を差し伸べようとする者は誰もいなかった。
アリスは、院長親子とジャグの瞳にも男たちと同じ残忍さが覗いているのを見て、や

りきれない気持ちになる。
（デクス……本当になんてバカなの……。弱いくせに、どうして昨日のうちに逃げなかったのよ！）
そのとき、
——試すがいい。力を試すがいい。我は、次なる魔界の王リビングアーマー様の下僕……。
あの声が脳裏に響いた。アリスは昨夜の契約をはっきりと思い出した。
デクスはもう声をあげる気力も残っていないらしい。顔を腫らし、体じゅうに血を滲ませて、ぐったりしてしまっている。
「力を！」
アリスは叫んだ。
地響きが伝わってくるまでに、ほんのわずかの時間しかかからなかった。
「うわ！　魔物だ！」
誰かが叫んだ。
「門を閉めろ！　中に入ってくるぞ！」
赤い土煙を立てて走ってくるのは、魔物の大群だった。ふっと空が暗くなる。

アリスは飛行系の魔物が大挙してこちらに向かってくるのを満足そうに眺めた。
「このハーフエルフが！　何をした⁉」
院長が鬼のような形相でアリスを怒鳴りつけた。アリスはおかまいなしにデクスを抱き起こすと、
「しっかりしなさいよ。行くわよ」
と、耳元に口を寄せて言う。
「ア、アリス……」
デクスは赤く染まった歯を見せて笑おうとし、痛みに顔を歪めた。
門と柵が跳ね飛ばされる。
「うわああっ！」
男たちが魔物の爪にかかり、踏み潰された。子供たちは泣き叫びながら逃げ惑う。
「や、屋根にっ！」
天井を指差したのはバーニィだった。ガリガリと音がする。空からやって来た魔物がとりついた屋根を壊すより早く、彼はその場を逃げ出した。
アリスは片足を引きずっているデクスの手を引くと、孤児院の敷地から悠々と歩いて出た。背後に聞こえる魔物の咆哮、阿鼻叫喚、逃げ惑う鶏の声――。

（力……これが〝力〟！　私は〝力〟を手に入れたんだわ！）
建物が潰れるめきめきという不気味(ぶきみ)な音を背に、アリスは圧倒的な幸福感に酔った。
そんなアリスの唇に浮かんでいる微笑を、デクスは腫れあがった目でじっと見下ろしていた。

第三章

「アリス、アリス。もうちょっとゆっくり、アリス……」

足を引きずるデクスを、アリスは待たなかった。孤児院を離れ――少し前に建物が全壊する轟音が響いてきたばかりだ――、ハイマの出口に向かって歩く。

「アリス……」

ふいに、アリスは振り向いた。

「私を呼び捨てにしないで」

デクスは、

「ご、ごめんよ、アリス……ちゃん」

と、首をすくめる。

「ふふっ。そうね、私はアリスちゃんよ」

アリスは楽しそうに笑うと、

「あいつらみんな死んじゃったわね。いい気味～」

と、歌うように言った。

やがてふたりはいつもの分かれ道にさしかかった。

「あのおばあちゃんの家に行くわ」

「えっ。でもあの人はもうずっと前に死んじゃって、いないよ。知ってるよね？」

デクスは不思議そうに首を傾げた。
「あら、別についてて来なくっていいのよ」
「行くよ行くよ！　ぼくも……いや、オレも」
デクスはアリスの前に回り込むと、
「アリス、ちゃん。聞いて欲しいんだ。ぼく、いやオレはアリスちゃんがいなかったら今ごろ死んでた。アリスちゃんは命の恩人だよ！　感謝してる！」
と、必死に訴えた。アリスはただにこにこして聞いている。
「……なんでもする。アリスちゃんのためならなんでもする！　どんなことでもしてぼくはアリスちゃんを守る。じゃなくて、オレは守る。ええっと、ぼレは……」
「あらあら、無理しないで」
アリスは笑い、それから真顔（まがお）になった。
「どっちにしても、その血だらけの顔を近づけないでくれる？」
「あ……ごめんよ」
デクスがあわてて身を引いたとき、ふたりの横を村人たちが慌てて駆け抜けて行った。
「しばらくはみんな大騒ぎね。さ、行きましょ」
アリスはさっさと歩き出した。やがてあの老婆の家に着くと、まるで何度も訪れたこ

とがあるかのように裏庭に回った。
「やっぱりね……」
アリスはそこだけ土の色が変わった箇所を指さすと、
「デクス、掘ってみて」
と命令する。デクスが言われたとおりにすると、果たして冒険者が持っていた荷物と、
布に包まれた金品が出てきた。
「こ、これ……なんで⁉　どうして？」
デクスが目を白黒させる。
「たぶん……ここに残ってた気が、院長やスカイたちを引き寄せたのよ」
「ええっ⁉　スカイたちが犯人だったのかあぁぁぁぁ！」
のけぞるデクスに、
「今ごろなに言ってるの、おバカさん」
アリスは呆(あき)れてため息をついた。
「着のみ着のまま出てきちゃったんですもの。これは旅費に貰っていきましょ」
「行くって、アリスちゃん、どこ行くの？」
乾きかけた血糊(ちのり)の上に泥をまぶした顔で、デクスが訊いた。

「……探し物があるの」
そっけなく答えたアリスは金品をまとめてしまうと、小さな財布を取り出してデクスに渡した。
「……これは？」
デクスが開けてみると、硬貨が詰まっている。一緒に卵を売りに行く度に、デクスから渡される代金からアリスがこっそり抜いていたものだった。
「少しずつ貯めておいたのよ。でももうこんな小銭いらないし、あげるわ」
「本当かい？　ありがとう、アリスちゃん！　オレのためにこんなへそくりを！」
感激して、デクスは泣き出さんばかりだった。
「別にあんたのためじゃないわよ。それ持って、どこでも好きなとこに行っちゃって」
「え」
デクスの顔からぱらぱらと泥が落ちる。
「そんなぁ。オレはアリスちゃんと一緒に行くよ。一生守るよ！　アリスちゃんに救われた残りの命、全部アリスちゃんに捧げるよ！」
「……」
アリスが口を開こうとしたとき、すぐ近くで風が起きた。

わかってるわよ、とアリスはつぶやく。デクスの耳がぴくりと動いた。
「ああ、ありがとう、アリスちゃん！　以心伝心(いしんでんしん)でわかってくれてうれしいよ」
「……うるさい大人に捕まらないうちに、早く行きましょ」
アリスは足早に歩き出した。
ハイマの村を出るまで、追い風がずっとふたりの背を押していた。

のちにシルヴァラント解放戦線ヴァンガードに所属するようになるまでの五年余り、ふたりは旅を続けることになる。
むろん魔物との約束を果たすためではあったが、それはアリスとデクスにとってこの世界を知る初めての機会だった。
マーテル教の実態、人々の暮らし、テセアラとシルヴァラントの軋轢(あつれき)――。
そしてアリスにとってはなにより〝力〟の意味を知る旅となった。

村は出たものの、アリスにこれと言って目的の場所があるわけではなかった。
なにしろハイマの孤児院以外で暮らしたことがない。デクスも同じだった。
「アリスちゃん、これからどこ行く？」
山道に差しかかったとき、道標を見つけたデクスが訊ねた。
「そうねぇ……」
「ここから近い街っていったら、ルインかアスカードだけど……アリスちゃん、アスカードはいやだよね」
「あら、どうして？」
アリスはデクスの口調に微かな同情が含まれているのを感じて、思わず強い口調になった。
「だってアリスちゃんはアスカードで……」
「関係ないわよ。どこで親に死なれたかなんて、今さら。でも、こっちへ行くとあのお

ばさんに出くわしちゃうかもしれないわね」
「エイリーン先生か。確かに」
デクスは自分が院長夫人の名前を初めてまともに口にしたことにも気づかず、頷いた。孤児院の悲運を聞きつけた彼女がアスカード近くの救いの小屋にいれば、エイリーンはすぐに飛んでくるだろう。
「じゃあ、ルインにするかい？」
「どこでもいいわ」
アリスは自分の服の継ぎのあたった袖に目をやって顔をしかめる。とにかくいちばん近くにある店で、服や身の回りの品を買い揃えたかった。
「どこでもいいって、でもなにか探し物があるんじゃなかった？」
「……」
答えないアリスに、デクスは仕方なく先に立ってルインへの道をとる。アリスにも異存はないようだった。
「……そうか。なるほどー」
しばらく歩いてから、アリスはひとり感心したように頷いているデクスに、
「なによ」

と訊ねた。

「いやあ、孤児院出てから足の裏が痛くて。私刑ってこんなところまで痛くされるもんなんだ、ひどいなあって思ってたんだけど……よく見たら」

「!?」

アリスは、デクスが裸足なのを見て思わず背後を振り返った。落ち葉の積もった道に点々と血の跡が見える。

「いててて、石が刺さるんだよなぁ」

「もう！　葉っぱでも何でも巻きつけて歩きなさいよ！　血の匂いなんか撒き散らして歩いて、今度こそほんとにエサになっちゃうわよ」

「心配してくれるんだね、アリスちゃん。うれしいよ」

アリスは呆れながらも、一緒に出てくることになったのがデクスでよかった、と密かに思った。デクスなら自分のことをハーフエルフだと吹聴するようなことはないだろう。

(でも、いつ裏切るかわからないから、用心だけはしてなくちゃ)

孤児院での差別は身に染みている。広い世界に出れば、もっとひどいことがあるかもしれない。

これからもずっと誰にも気を許さずにいよう、とアリスは心に誓った。

ようやくたどり着いたルインは、想像以上に美しい街だった。

街の中央の広場には、大きな噴水がある。アリスもデクスも、こんなふうに人工的に作られた設備を目にするのは初めてだった。

それでも、噴水を立ち止まって眺めている者はいない。降り注ぐ日の光の下、街の人々はゆったりと歩き、女たちはお喋りをし、笑いさざめいていた。ハイマの村の殺伐とした雰囲気とは、あまりにも違っているように思えた。

「うわあ、虹だ！」

絶えず噴き上げられている豊かな水に七色の帯を見つけて、デクスが叫ぶ。ハイマの空にかかる虹は見たことがあったが、あれはまったくの天気まかせ、自然の気まぐれだった。

「贅沢だなぁ」

彼はびしゃびしゃと音を立てて噴水の中に入ってゆく。水は膝下くらいまであるだろうか。

「うわ、しみるしみる」

痛い痛いと言いながらデクスが足の裏の傷を洗っていると、ちょうどそこを通りかかったひとりの中年男が、

「こら、そんなところで何してる」

と、立ち止まった。たった今買ってきたらしいパンを抱えている。焼きたての香りに、アリスは急に空腹を覚えた。

「あ……すみません。ちょっとケガをしてしまって……」

アリスはすまなそうに謝り、デクスにちらりと視線を走らせた。

「ケガを？　そりゃ大変だ。君たちはこのへんの子じゃないようだが……大人と一緒じゃないのかい？」

「いえ……」

男はふたりを交互に見ていたが、

「まあいい。とにかく手当てしないとな。うちはすぐそこだから来なさい」

と、デクスに水から上がるよう手招きをした。

「アリスちゃん……」

デクスがアリスの耳元で囁く。

「どうする？　大丈夫かな」
「平気よ。何かあったらまた潰してやればいいだけ」
アリスは平然と前を向いたまま答えた。

男はロビンといい、妻とふたりで暮らしているのだと言った。
「あなたたち、どこから来たの？」
夫の買ってきたパンをぶ厚く切り、レタスとハム、チーズをはさんだだけのサンドイッチに無心にかぶりつく子供たちを、妻のステラは慈愛のこもった目で見ていた。
「……ぐ」
デクスがパンを喉に詰まらせそうになる。
「ほらほら、お茶をお飲みなさい。お嬢ちゃんはミルクのほうがよかったかしら」
「これでいいです」
アリスは、自分がずいぶんと子供に見られていることに気づいた。無理もない、実際まだやっと十歳なのだ。

「あなたたち、兄妹……にしてはあまり似てないみたいだけど」
「デ、デクスの父さんと、私の父さんが兄弟で……」
アリスは口からでまかせを言う。デクスは「なるほどその要領か」という顔で頷いた。
「じゃあ、いとこ同士ってわけだな」
ロビンが笑ってみせる。
「で、父さんたちと母さんたちは？」
「はい、牧場へ行きました！」
妙にきっぱりとしたデクスの言葉に夫妻は驚き、素早く目配せを交し合った。
「ま、まあ……牧場って、あの恐ろしい？」
「ディザイアンに連れて行かれて死にました！」
「……」
夫妻は顔を見合わせている。
(あーあ、デクスったら。それはケイティたちの話でしょ)
アリスはテーブルの下でデクスの足を思い切り蹴ってやった。
「痛いっ！」
「えっ、そんなに痛むのかい？　薬が合わなかったんだろうか」

ロビンは、つい今しがた自分で巻いてやった包帯を覗き込む。デクスは黙って首を振った。

つまり、とロビンは気を取り直して続ける。

「君たちはアスカードから来たのかな。それともイセリア？　パルマコスタってことはないよなあ」

イセリアとパルマコスタにも、牧場はあるらしい。覚えておかなきゃ、とアリスは思った。

「そりゃあアスカードでしょう。子供の足ですもの」

ステラは夫に言い、

「ディザイアンの話はいろいろ聞いているし、私も見たことがある。この街にも来たことがあるのよ。ふたりで逃げて来たのね。怖かったでしょう、かわいそうに」

と、アリスの髪をなでようとした。さっと身を引いた少女にステラは傷ついた表情になったが、すぐに微笑を浮かべる。

「なんにせよ、デクスのケガが治るまでここにいるといいわ。でも故郷へ戻れないのだとしたら、これからどこに行くつもり？」

「……」

アリスは答えず、
「お願い。なんにも聞かないで。そして私たちのことは誰にも言わないで」
と、夫妻をじっと見つめた。
「いいわ。約束する。もし人に聞かれても、うちの親戚の子だっていうから大丈夫よ。ねえ、あなた」
ステラはそう言い、アリスたちのベッドを用意するために席を立った。

まだ日のあるうちから、ふたりは隣り合わせに与えられたベッドに潜り込んだ。
頭が枕についたとたん、アリスはすとんと眠りに落ちてしまう。
深い深い眠りだった。物心ついて以来、こんなに深く眠ったことはない。たとえロビンたちに信頼がおけなかったとしても、ハイマから慣れない道を歩きづめだったので、体力の限界でもあったのだ。
翌朝、アリスが目覚めてみると、デクスは高熱を出してうなされていた。
「大変。きっと無理がたたったのね。アリスちゃん、デクスのお兄ちゃんは普段から熱

を出しやすい体質なのかしら」
濡れタオルを少年の額に載せながら、ステラが訊ねる。すっかりデクスをアリスのいとこだと信じきっていた。
「さあ……初めて見たわ。バカは風邪ひかないはずなのに」
「あらあら」
ステラは苦笑し、ロビンに医者を呼んでくるよう頼んだ。
「デクスのことはうちの人に任せて、私たちはお買い物に行きましょうか」
彼女もアリスたちの身なりが気になっていたらしい。朝食のあと、アリスを街の店に連れて行ってくれた。そして可愛らしい服や、充分すぎるほどの生活用品を吟味して買ってくれた。アリスがいくら自分で払うと言っても、彼女はきかなかった。それは今後のためにとっておきなさいという。
(子供を捨てる親もいれば、赤の他人の子供にここまでする人もいる……。本当に世の中いろいろだわ。たまたまこのおばさんの子供に人間として生まれたとしたら、幸せだったかしら)
アリスは、それでもそんな運に賭けるような悠長なことはしていられないと思うのだった。〝力〟さえあれば、この程度のことはありがたくも何ともないはずだ。

「デクスはまず靴だけれど……サイズがわからないわね」
「私も知らない」
ステラとアリスが男物を扱っている店で喋っていると、店員が聞きつけて近づいてきた。
「目録(カタログ)をお持ちになりますか？」
ステラは礼を言って薄い冊子を受け取った。
「アリスちゃん、他になにか欲しいものはあるかしら」
アリスは少し考え、
「本」
と答えた。
「本？　おばさんも本は好きよ。どんな本が読みたいの？」
ステラは笑顔になる。
(どんな本……って)
それが問題よ、とアリスは考える。
魔物――魔族リビングアーマーの部下――との契約のため禁書を探す約束をしたものの、どこをどう探したらいいものか、皆目見当(かいもく)がつかない。そもそも禁書とはどんな本

なのだろう。
「わからない」
「じゃあ、本屋さんへ行ってみましょうか」
ステラは街はずれにある小さな本屋へとアリスを案内してくれた。
（ちがう……）
書棚に並ぶ背表紙を目にしたとたん、アリスは落胆した。
（こんなの、孤児院にもあったような普通の本ばっかりじゃない。禁書はきっと、もっと……）
アリスは本に触れながら店内を歩いてみる。やはり何も感じなかった。
（出会えればきっと私にはわかるはず。でも、そんな本が一体どこにあるのかしら）
「これなんかどう？」
ステラは絵本を一冊選ぶと、アリスに差し出した。
「『お姫さまの優雅な一日』ですって。女の子ってこういうのが好きよねぇ」
「……おもしろそう」
愛想笑い（あいそわら）いをすると、ステラは嬉々として店主に金を払った。

家に戻ると、デクスが目を覚ましていた。
ベッドに起き上がってパン粥(がゆ)をすすっている。
「やあ、お帰り。医者(せんせい)に来てもらったよ。やはり疲れだそうだ。養生(ようじょう)すれば治るってさ、ゆっくりとね」
看病していたロビンは、どこかうれしそうに言った。
「アリスちゃん、ごめん」
デクスは上気(じょうき)し、まだとろんとした顔でアリスに詫びた。
「あら、私に謝ることないわ」
山道で倒れないでくれて助かったと思うと同時に、アリスはほっとする。
「そうですよ、デクス。何も気にしなくていいのよ」
ステラは楽しそうに買ってきたアリスの服を夫に見せる。
「うん、可愛いね。うちにも子供がいればねえ」
ロビンも相好(そうごう)を崩した。
「デクスにはこれを貰ってきたわ」

「何ですかこれ」
デクスは靴の目録を手にとって首を傾げた。
「これで好きな商品が選べるの。店にもし在庫がなければ取り寄せてもらえるのよ。遠くまで買いに行かなくていいの」
「……そんな便利なものが！」
デクスは目を輝かせてさまざまな靴の写真に見入った。
「郵便で取り寄せるのさ。いわば郵便販売、いや、通信販売というべきかな」
ロビンの言葉に、
「それは世界のどこにいてもできるの？」
とアリスが訊ねる。
「うーん、それはどうだろう。なにしろここシルヴァラントは衰退世界だからね。混乱しているところも多い」
「衰退世界……？」
「そうだよ。ディザイアンがマナを……学校で習っただろう？」
アリスはデクスと顔を見合わせ、
「行ってないの、学校」

と答えた。
ステラが咳払(せきばら)いをする。
ロビンは「しまった」という表情を見せたあと、話を戻した。
「ま、まあ、君たちが大きくなるころにはきっとこういう買い物の仕組みもしっかりできあがるんじゃないかな」
「……通信販売、かあ」
デクスはいたく興味をひかれた様子で、見た目もしゃっきりとしてきたようだった。
「でもね、デクス。この街の店は意外と品揃えがいいのよ。わざわざ取り寄せたりしなくても、たぶんあなたの気に入るものも置いてあるわ」
ステラが言うと、デクスは露骨に残念そうな顔をした。

ルインの街でアリスとデクスは都合五日間を過ごした。
その間に夫婦はふたりに世界のあらましや歴史――ディザイアンやマナのことなど教えてくれた。
アリスにとってはシルヴァラントがマナの減少によって衰退しているという事実より

も、禁書に魔族を封印したミトスが、古代大戦を終結させた勇者ミトスらしいとわかったことがなによりの収穫だったかもしれない。

ふたりは旅支度を整え――幸か不幸か通販の必要はなかった――、デクスはこっそり武器まで入手して再び旅立つことができた。

のちにルインがディザイアンの介入を受けて無残に壊滅したと聞いたとき、アリスは真っ先に、親切だったロビンとステラ夫婦のことを思い出したものだった。

街の人々はアスカードの牧場から逃げて来た人々をかくまったらしいが、おそらくふたりも手を貸したに違いない。そしてそのとき、昔家に泊めたことのある、いとこ同士の子供たちの行く末に思いを馳せてくれたような気がした。

ルインを出てからしばらくの間、アリスとデクスはシルヴァラント各地を回ることに余念がなかった。

アリスは当初、禁書のことはデクスには伏せておくつもりだった。だが、世界地図を買い込み、通った道、泊まった村をひとつずつ塗り潰している彼に事情を話す日は、意外に早くやって来た。
オサ山道だった。
イズールド方面へ抜けようとしていたふたりの目の前に、突然ベアに似た小ぶりの魔物が現れた。空腹なのだろう、低く唸り、目を血走らせている。彼らの前を歩いていた商人らしき男は、一目散（いちもくさん）に逃げてしまった。
「アリスちゃん危ない！」
デクスはとっさに剣を抜き、アリスを庇（かば）うように前に出た。誰かに指導を受けたことはなかったが、旅を重ねるにつれ、ほどほどの敵なら倒せる程度の腕前になっていた。
「アリスちゃんになにすんだっ！」
デクスは一刀のもとに小さな魔物を斬り捨てたが、運悪くその親たちが近くにいたようだった。
「なんだ、家族づれかよ……！」
ガサガサと木の枝を分けて出てきた魔物たちにデクスは焦ったが、親のベアは相当に大きい。思わずデクスが怯（ひる）んだところに、一体が跳んだ。

「やめなさい！」
アリスが魔物に向かって叫ぶと、ベアはとっさに鋭い爪をひっこめ、デクスの肩を押しただけで着地する。まるで犬が飼い主にじゃれついてでもいるかのような動きだった。
「もういいわ」
アリスが命じる声に、魔物は二体とも掻き消すように樹木の間に姿を消した。
「……アリスちゃん。前からすごいなと思ってたんだけど」
しりもちをついたデクスは泥だらけのまま立ち上がる。
「ハーフエルフっていうのは魔術で魔物を操ることもできるんだね。そういうのって、生まれつきなのかい？」
「……」
「なんかアリスちゃん、オレに隠してる感じ……っていうか、隠しまくりだよ！　探し物があるなんて言ってこんなに旅を続けていながら、なにを探してるのかも教えてくれないし」
「……」
「ふたりで探せば効果は二倍、手間は半分、喜びはまたまた二倍になるのにさ」
いじけだしたデクスに、アリスは内心もっともだと思う。

新しい街に着く度に、本がありそうなところはくまなく探してきたつもりだった。それでも見つからないのは、きっとなにか探す視点が間違っているとしか思えない。デクスなら案外、人と違った見方ができるのではないだろうか。

いつまでも禁書を見つけだせなくて、あの魔物に契約を解除されては元も子もない。アリスは山道の端に腰かけ、デクスに魔物が孤児院で接触してきた夜の話をすることにした。

「……じゃあ、アリスちゃんの〝力〟っていうのは、自分のだけじゃないんだね」

話を聞き終わったデクスが言う。

「がっかりした？」

「そんなことないよ。それより、その禁書っていうのを見つけちゃったら、魔界の魔族が出てくるんだろう？　世界がめちゃくちゃにならないかな」

「……そんなこと、考えたこともなかった」

アリスは驚いてデクスの顔をじっと見つめた。

「でも、それもいいじゃない。もともとはこっちの世界にいた魔族なんだし。それに私だって、人間だけど魔物と契約してるから魔術が使えるっていうふれこみのほうが、よっぽど差別されなくてすむと思うわ」

そういうもんかな、とデクスは首を傾げた。
「まあ、オレはアリスちゃんについて行くだけだから。これからは、一緒に禁書を探すよ」
「……ありがと」
当てにはせず、アリスは微笑んだ。

エクスフィアのことを最初に知ったのは、いつだったろう。
たしかデクスに禁書のことを打ち明けてから半年ほどたったころだ。
街や村に入ると情報集めと称して、ふたりはしばらく別行動をとることにしていた。
その日、夜になってから宿屋に戻ったデクスが、
「そういえば、骨董屋(こっとうや)って知ってるかい？」
と、待っていたアリスに訊ねた。

「骨董？　古いものとかのこと？」
「そう」
そのころから伸ばし始めた髪を後ろでひとまとめに括りながら、デクスは頷いて見せた。
「今日知り合った旅のおっさんが、骨董屋には世界中の珍しいものが集まってるって言ってたんだ」
「ふうん」
「骨董品になるのかどうかわかんないけど、珍しい本なら誰かが売りに来ることもあるんじゃないかって。本マニアとかコレクターとか、けっこういるらしいから、店で買い取ってくれるらしいよ」
なるほどね、とアリスはテーブルに頬杖をついた。
「でも、あんまり見かけないわね、骨董屋って」
「それがさ、ハコネシア峠に一軒、すごくいい店があるらしいんだな」
「ハコネシア峠!?　前にイズールドから船でパルマコスタへ行ったでしょ？　そのあと、通らなかったかしら。そんな店……」
「実はオレも覚えてないんだけど」

カリカリと頭を掻きながら、デクスは苦笑いする。

「アリスちゃんがよければ……」

「いいわ。もう一度行ってみましょ」

あそこにも救いの小屋があったと思い出しながら、アリスは頷いた。

あの峠にはきっとまた旅業の人々が大勢歩いていることだろう。

アリスは旅業中の人々が好きではなかった。

なにが楽しいのか、ただ黙々と歩き続けるだけの日々。そのくせ頭の中は「マーテル様にああしてほしい」「こうしてほしい」という欲望でいっぱいなのに違いない。

分不相応な願いは、自分の非力を認めているようなものだ。自分を守れず死んだ両親もまた、弱い人たちだったのだろうとアリスは思った。

骨董屋は、ハコネシア峠の関所のすぐ近くに建っている古い小屋だった。

すごくいい店、と聞いていたのでアリスは拍子抜けしてしまう。店の前にはどう見ても価値のなさそうなガラクタ——欠けた食器、割れたガラス、足が三本しかない椅子、刃（は）のない包丁（ほうちょう）など——が、客引き用に並べられている。

（これじゃあ、前に来たとき気にもとめなかったはずだわ）

アリスは、やはり隣であっけにとられているデクスを横目で見、ため息をついた。そのとき、

「いらっしゃい」

ふたりの姿を認め、店内からひとりの若者が出てきた。丸いメガネをかけている。

「あんた、店の人？」

「そうですけど、そうじゃないです」

なんだどっちだよ、とデクスはふてくされる。

「店主のコットンさんの具合が悪くて、店番を頼まれてるんですよ」

若者はメガネをずりあげながら言い訳した。

「あ、でも、中にあるもののことはだいたいわかりますから、何でも聞いてくださいね……お客さん、今日来てよかったかもしれないですよ」

「なんでだよ」
デクスは入り口をくぐり、ずかずかと店内に入りながら訊いた。
「コットンさんてお爺さんなんですけど、男の人とは口をききませんから」
「客商売なのに？」
デクスは所狭しと並べられている骨董品――外のものよりはずっとましだ――をじろじろと眺める。アリスもそれらしき本がないか探し始めた。
「今日はなにかお探しですか？」
ああ、とデクスは応えた。
「禁書を探してるんだ」
「キンショ？　キンショですか……なんだっけなキンショって……」
若者は困った顔でぶつぶつとつぶやいていたが、ぱっと顔を輝かせると、
「ああ、あの農機具の！」
ポンと手を打つ。
「あいにく切らしてまして。すみませんねぇ」
「はあっ……」
アリスは聞こえよがしにため息をついてやった。ふと、埃（ほこり）だらけの丸テーブルに目が

止まる。
「これ何？」
テーブルの上に載っているノートを指さして、アリスは訊ねた。開いているページに、魔物のような人間のような生物が描かれている。二足歩行だが、頭が異常に膨らんでおり、膨張のせいか顔はどうなっているのかほとんどわからなかった。それなのに、どこかもの悲しげな印象を受けるのはなぜだろう。
「ああそれですか。今から少し前、旅の画家さんが路銀(ろぎん)に困って売りに来たんです。何年か前のもので、化け物のスケッチらしいですよ」
「化け物……？」
デクスがやって来てノートを覗き込む。
「こんな魔物、遭ったことないな」
「いえ、魔物じゃなくて人間なんだそうです。パルマコスタの牧場で働かされていた人だって言ってましたかね」
アリスとデクスは思わず顔を見合わせた。
「この、手についてるのは何かしら」
アリスはスケッチに顔を近づける。小さくてよくわからないが、それは飾りのように

も単なる宝石のようにも見えた。
ええっと、と若者はメガネに手をやって思い出す目つきになった。
「たしかなんとかっていう名前で、完成すると〝力〟がどうとかって」
（力？）
アリスの内で無視できない何かが生まれた。
「何言ってんだかぜんぜんわかんねえ。売り物のことはわかるんじゃなかったのかよ」
デクスが肩をすくめる。
「その旅の画家って、どっちに行ったかわかるかしら」
「アリスちゃん……？」
「お金がないから救いの小屋に泊めてもらうって言ってましたけど。でも信者じゃないらしいんですよね。まあマーテル教っていうのはありがたくてそういう人をも救……」
みなまで聞かず、アリスは店を出た。
「ああ、待ってよ！　アリスちゃん」
デクスが追ってくる。
「急にどうしたんだい？　まさかあれが本に閉じこめられた魔族……」
「そんなわけないでしょ。ただ、知りたいのよ。〝力〟がどうとかって、言ってたじゃ

ない」
「また〝力〟か……」
「なによ。悪い？」
アリスはデクスを睨みつけた。
「私のこの気持ちは人間にもエルフにもわからないわよ。それより……」
アリスは歩調を緩めると、
「救いの小屋へ行って、その人を呼んできてくれない？」
とデクスに言う。
「いいよ」
デクスは気安く答えた。
もとより不特定多数の人間が集まっている場所にすすんで行くことを、アリスは好まない。
（ハーフエルフだっていうことがバレるのが嫌なんだろうなあ。かわいそうに。アリスちゃんが堂々と生きられるようになるためには、やっぱり〝力〟が必要なんだな）
デクスはアリスを涼しい木陰で休ませると、救いの小屋に向かって走り出した。

デクスに案内されてやって来た画家の男は、レイルと名乗った。
「やあ。僕に聞きたいことがあるっていうのは、きみ？」
レイルは口ひげを蓄えていたが、デクスとそれほど年齢差はないように見える。
「あなたのスケッチを見たの」
アリスは偶然骨董屋でレイルのノートを見たことを話した。
「それはうれしいね。二束三文で買い叩かれちゃったけど、きみみたいな可愛い女の子の目に止まるなんて。どの風景がよかった？」
「え？」
アリスは首を傾げた。
「風景じゃなくて、化け物の絵よ」
そういや他のページは見なかったな、とデクスは腕組みする。
「あれがなんなのか、どうしてあんなことになってしまったのか聞きたいの」
「そうか……。僕、風景画が専門なんだけど……あのスケッチね。うーん」
レイルは複雑な顔になったが、

「まあ、僕の知っている範囲のことでよければ話すよ」
と言ってくれた。三人は柔らかな草地を選ぶと、腰を下ろした。
「僕には幼なじみがいてね。彼は……ディザイアンになったんだ」
アリスがハッとする。
「そう、きみたちは嫌がるだろうけど彼はハーフエルフでね。あれは二年くらい前だったかな。僕は旅の途中で、彼が働いているパルマコスタに立ち寄った。彼もちょうど休暇がとれた。しばらくはガキのころの懐かしい昔話さ」
レイルはそこでふっと眉を曇らせた。
「そのうち彼は自分の悩みを打ち明けだした。ディザイアンのことは？」
「ざっとしか知らないけど……」
アリスは答える。
「そう。彼らはハーフエルフが最も優良な種であると主張しているんだ。だから人間を使役し、痛めつけ、エクスフィアを埋め込む……」
「ちょっと待って。エクス、フィア？　それってもしかして化け物の手についてた」
ああ、とレイルはアリスに頷いた。
「僕もよくは知らない。幼なじみの彼も、緘口令（かんこうれい）が敷かれてるのか、くわしくは教えて

くれなかったよ。ただ、それを装着すると能力が高くなるらしいんだ。だからディザイアンは全員つけてる」
「ん？　変じゃないか？」
デクスが唇を歪めた。
「なんで捕まえてきた人間をわざわざ強くしてやるんだよ。オレだったらすたこら逃げちゃうよ。あ、強制労働させるのには力が強いほうがいいってことかな？」
「さあ……。彼はそこまでは話してなかった。けど、たまに怖いことが起きるって。働かせてた人間が化け物になっちまう。抑制できなくなるらしい。彼の悩みというのはそこだったんだ。絶対、口にはできないけど、自分たちのやっていることは本当に正しいのかって……」
「正しいわけないよ」
デクスが即座に言う。
「そうよね……。そもそもエクスフィアって何なのかしら」
「無機生命体——彼はそう言ってた。あのスケッチはね……」
レイルはそこでふうっと息を吐いた。
「彼に化け物の話を聞いた翌日に、ほんとに現れたんだ。びっくりしたよ」

彼はパルマコスタで軍用船をスケッチしようと港にいたのだという。そこへどこから化け物が走って来た。むろん街は一時騒然(そうぜん)となったらしい。
「化け物はどうしたと思う？　海に身を投げたんだよ、自らの意志でね。飛び込む前に、一瞬だけ目が合った。ひどく悲しそうに見えた……それで僕は、その化け物が幼なじみの言ってた、人間の変わり果てた姿だとわかったのさ」
レイルはその姿が脳裏に鮮明に焼きついているうちに、急いでスケッチを描き残したのだという。
「……僕の知っていることはこれだけだよ。役に立った？」
旅業の人々が急ぎ足で目の前を通り過ぎてゆく。レイルは立ち上がると、
「それじゃあ、僕も戻るよ。今度どこかで会えたら別の絵もみてほしいな」
と、アリスたちに笑いかける。それから思い出したように、
「そうそう。エクスフィアは、ここについていたよ」
自分の手の甲を指すと、人々の間に紛れ込んだ。
しばらくはアリスもデクスも口をきかなかった。
「……なんだかすごい話だったね」
ようやくデクスがそう漏らすと、アリスは、

「牧場って、いろんな意味で怖いところだったんだわ」

と、ひとりごとのようにつぶやいた。

「私、孤児院に長くいて世界のこと何も知らない。旅に出ていろいろ見聞きはしてるけど、まだまだ知らないことが多すぎる……だから禁書だって見つからないのかもしれないわ……」

「アリスちゃん……オレがついてる。元気出して」

デクスは思わずアリスの華奢（きゃしゃ）な肩に手を回そうとした。その瞬間、強い衝撃と共に吹き飛ばされる。

「うがぁっ！」

デクスが座っていたあたりの土が抉（えぐ）れ、バラバラと彼の上に降り注いだ。

「調子に乗らないでよ。誰がアリスちゃんにさわっていいって言った？」

「ご、ごめんよ、つい……」

さっさと立ち上がって歩き出したアリスを、デクスはよろよろと追いかける。

「待ってよ」

「もう！　泥だらけで追いかけてこないで！　キモいのよっ！」

アリスが護身用と称して鞭（むち）を買ったのは、それから間もなくのことだった。

契約していた魔族の力が突然消えたのは世界再生の少し前だった、とアリスは記憶している。

その日、デクスと一緒に入った森は思いのほか深かった。まだまだ抜けられそうにない。

「もう、アリスちゃんお腹すいちゃった。だからさっきの街でお昼を食べようって言ったのに！」

アリスは機嫌の悪さを隠そうともせず、デクスを睨みつけた。

「もう少しのガマンさ。夕飯までには次の街に着くよ」

そう言うデクスのお腹からも、情けない音が聞こえてくる。

「ああウザーい！　あんたって、お腹の鳴る音までキモいのね」

「アリスちゃん……」

デクスはちょっと悲しそうな顔になったが、

「よし。それじゃあおやつにしようよ」
と提案する。
「おやつ？　この森、果物（くだもの）もなにも見当たらないじゃない」
硬そうな葉を尖らせて聳（そび）え立（た）っている樹木に目をやって、アリスは言った。
「でもたぶんウサギくらいはいるんじゃないかな？」
「ウサギはおやつにならないでしょ」
アリスは頬を膨らませかけたが、この際食べられればなんでもいい。
「ま、ガマンしてあげるわ。さっさと薪（まき）を拾ってきて」
「わかった。きみのためにスペシャルにして豪華な薪を集めてくるからね、アリスちゃん。すぐに戻るよ」
デクスはポーズを決めると、樹木の間に体を滑り込ませて消えた。
ひとりになってしまうと、アリスは改めて周囲を見回した。確かにウサギが潜んでいそうな繁みがある。
(デクスが戻るまでに、獲物を用意しておきましょ)
これまでにも、アリスは魔物を操って狩りをさせてきた。食料の調達にこんな便利なことはない。

「誰か出てきて、ウサギを捕りなさい」
そう口に出したときだった。
(…………?)
ふいに、たとえようのない空虚感がアリスを捉えた。
「え……なに……?」
思わず胸を押さえる。決して具合が悪いわけではない。
森はシンと静まり返っていた。
「……どうしたの? ねえ、早く誰か出てきなさいよ!」
それでも魔物はただの一体も姿を現さない。
「まさか……」
血の気が引いた。
魔物の力強い翼の音が聞こえてきたのはそのときだった。
「なぁんだ。脅かさないでよ」
アリスは自分の頭の上を旋回している飛行系の魔物を見上げ、ほっと笑みを浮かべる。
(そうね、鳥でもいいわ)
「ねえ、食べられそうな鳥を捕まえて来なさい。柔らかそうなのじゃなきゃダメよ」

そう命じた、次の瞬間だった。アリスは魔物の爪が肩にぐいっと食い込むのを感じ、悲鳴をあげた。

「きゃあっ！　なにするのよ！　離しなさいったら。許さないわよ！」

だが、魔物はアリスを離すつもりはないらしい。ふわりと体が宙に浮く。

「やめて！　降ろしなさい！　きゃあああっ！」

「アリスちゃん！」

デクスの声と共に、ぐいっと片足首をつかまれた。

「どうしたの!?　魔物がいうこと聞かないのかい？　わがままだなぁ」

「ちょ、ちょっとデクス！　さわらないでよ！」

「だって……こら、アリスちゃんになにすんだっ」

デクスは片手で抱えていた薪を放り出すと、魔物を叱りつける。

「デクス！　殺して殺して！　こんなやつさっさと殺しちゃってよ！」

「え。でも……」

「早く！　でないとアリスちゃんが死んじゃうのっ！」

「！」

さすがのデクスもやっと事態を飲み込んだようだった。大剣を抜くや否や、滞空して

いた魔物を一刀のもとに斬り捨てる。
どすんと音を立てて地面に落ちたアリスは、一緒に落下した魔物を呆然と凝視していた。
「………」
「アリスちゃん……」
「操れなかった……消えたわ……魔族の〝力〟が……」
震える声でアリスは言う。
「消えちゃった……私のち……から……」
彼女はしゃがみ込んだまま顔を覆った。
デクスは剣を鞘に収めながら、声を殺して泣いているアリスを見下ろした。
(孤児院でいじめられても泣かなかったアリスちゃんが、オレの前で泣いてる……！)
「なにかの間違いかもしれないよ。だから泣かないで」
うるさいわね、とアリスは顔をあげ、
「間違いなんかじゃないんだったら！　あんたがさっさと禁書を見つけないから、魔族に呆れられちゃったのよ！　キモいしキショいし、ほんとバカなんだからっ！」
自分でも言いがかりだとわかっていながらどうすることもできずに、デクスを罵った。



それからしばらくの間、旅を続けながら様子をみていたが、アリスの〝力〟が戻ることはとうとうなかった。
「本当に契約してた魔族はなにも言ってこなかったんだね……？」
デクスは歩く道すがらアリスに確認し、首をひねった。
「どういうことなんだろうな……やっぱりオレが悪いのか」
「もういいわよ。禁書を見つけられなかったのは私も一緒だもの」
アリスはため息をつく。
「でもさ、アリスちゃんはこれで無罪放免だろ？　すっきりしたと思えばいいんじゃないかな。これからはオレがナイトになって一生守るから……」
「……」
アリスは応えず、

（〝力〟を失うってこんなに不安なことだったなんて……）
と、唇を噛みしめた。
（なんとかしなくちゃ。別の魔族と契約するとか……でもどうやって……？）
そのとき、脳裏(のうり)に電光のように閃(ひらめ)くものがあった。
「エクスフィア！」
「えっ？」
デクスがびっくりして立ち止まる。
「……それって、いつかハコネシア峠で聞いた、あれのこと？」
「そうよ、エクスフィアだわ！」
アリスはレイルという旅の風景画家が話してくれた無機生命体のことを思い出していた。
（エクスフィアのことはまだよくわからないけど、前に聞いた話だと抑制できなくなるとか言ってたわよね……。だとしたら、装着したものを操る力を持っているかもしれない……）
アリスの頭がせわしなく活動を始める。
「デクス、いい？　大至急ディザイアンのいるところに忍び込んで、エクスフィアをと

ってきて。それから魔物を生け捕りにするの」

「……いったい何を考えてるんだい？」

困惑の表情でデクスが首を振る。それでもアリスに逆らうつもりは毛頭なかった。

「いちばん近い牧場がいいかな。それとも足を伸ばしてディザイアン（やつら）の本拠地まで行くか……」

人間を連れてくる度にエクスフィアをひとつずつ埋め込んでいるのだとしたら、牧場にも置いてあるのだろう。だが、シルヴァラントベースまで足を伸ばしたほうが質のいいものが手に入るかもしれない――。

彼は地べたに広げた地図を眺めながら考え始めた。

アリスが突然魔物を操る力を失った理由――サイバックの学術資料館にあった禁書が再生の神子（みこ）コレットの一行によって燃やされ、リビングアーマーが一緒に封印されていた魔族と共に死んでしまったため――をデクスが偶然知ることになったのはずっとあとのことだった。だが彼は、アリスには最期（さいご）までそれを告げることはなかった。

アリスはやがて魔物にエクスフィアを使って作った機械を装着し、自由に操る技術を開発した。
デクスがときには傷だらけになって生け捕ってきた魔物を、機械で操り動かしてみる。まるで自分の手足のように動く魔物の姿に、アリスは失った〝力〟を取り戻したかのような高揚した気分を覚えることができた。
おりしも世界は再生のときを迎え、大混乱のうちにあったが、アリスとデクスはエクスフィアの収集に熱中していた。破壊された牧場の跡はもちろん、エクスフィアは世界中に散っており、意外な場所から発見されることもあった。
しかしエクスフィアはなぜか個体差が大きく、実際の使用に耐えないものも少なくない。人間用に作られたもののせいだろうか、なにより魔物との相性が難しいのだ。それでもいくらもしないうちに数体の魔物を意のままに操れるようになったが、とにかく数を集めたいアリスは、禁書探しのときよりずっと精力的に旅を続けていた。

ユウマシ湖の北に位置する小さな村に滞在したときのことだった。
霧のかかる幻想的な湖といい、その周りを囲むなだらかな草原といい、空気もよく風光明媚な村なのだが、泊まっていた家族経営のちっぽけな宿は運悪くもめごとの真っ最中だった。
嫌でも耳に入ってくる話によると、息子がヴァンガードに入るため村を出るという。シルヴァラント解放戦線ヴァンガードは世界再生と共に産声をあげ、最近とみに勢力を伸ばしてきたレジスタンス組織だった。現在の生活に満足できず、理想に燃える若者にとっては憧れの集団だ。すでに世界各地に拠点ができつつあることは、アリスたちも聞き知っていた。
アリスがベッドで目覚めたとき、階下から一家の争う声が聞こえてきた。跡とり息子に家を出られては困る両親が必死に説得しているのだ。
（まだやってる……）
うんざりしているとデクスも起きてきたので、朝食前にあたりをひと回りして来ようと受付まで降りた。
「あら、お散歩ですか？」

宿のおかみは泣き腫らして真っ赤になった目を細め、ふたりに愛想笑いをする。返事をせずに外へ出ようとしたとき、ドンとぶつかってきた者がいた。
「ヘンリー！」
おかみが叫ぶ。
「待ちなさい！　まだ話は終わってないわ！　せめて父さんに……」
「うるせぇ！　俺はヴァンガードでひと旗あげるんだって何度も言ったろ？　シルヴァラント王朝が復活すれば、テセアラのやつらにこれ以上好きにされないですむ。俺の夢なんだよ。母さんたちだって喜ぶはずだ！」
「ヘンリー、待って。お願い、待って！　おまえに行かれたら私たちは……」
泣き崩れるおかみから顔を背けるようにして、荷物を肩に掛けたヘンリーは出て行ってしまった。
「なんか、大変みたいだね……」
デクスが囁く。
(うるさくっていい迷惑だわ)
さっさとアリスは外に出た。
「親がいるっていうのも苦労するんだなぁ」

　デクスはまったく別の視点から、ヘンリーに同情を寄せているようだった。
　湖のほとりまで来て、アリスは言った。
「このあたりを探すのは今日でおしまいにしましょ」
「え、どうして？」
「どうせあのおばさん、しばらくは泣き続けるわよ。あんな辛気くさい宿にアリスちゃんもう泊まりたくないし」
　そうだね、とデクスも頷く。
「このあたりにはほとんどエクスフィアもないみたいだから、今夜は我慢してあそこにもう一泊するとして……明日はもう少し南のほうへ行ってみようか」
　その日は一日湖周辺を歩き、ふたりは翌朝村を出ることにした。

「ねえアリスちゃん。このまま機械で操れる魔物を増やして、それからどうするんだい？」
　宿を出て南下する道すがら、デクスが訊ねた。
「どうって？」

にこりともせずにアリスが問い返す。
「いや……だからさ。こんなに頑張り続けなくても、たまにはゆっくり休みをとって、エクスフィアのことも魔物のこともみーんな忘れて、オレと一緒に疲れた身体に効能のある――」
「あらっ？」
アリスは道ばたの灌木（かんぼく）に駆け寄った。
「温泉とか行って……ちょっと、聞いてる？」
身をくねらせて語っていたデクスは、不満そうにアリスの肩越しにひょいと灌木の陰を覗き込む。そこには横たわる男の姿があった。
「おわっ!?　人が死んでる！」
のけぞった拍子に、デクスはそこに仰向けに転がっている死体に見覚えがあることに気づいた。
「こっ、これって、もしかしてきのう出てった……」
「そうね。あの宿の息子の……ヘンリー、だったかしら？」
アリスは、ヘンリーの変わり果てた姿を見下ろす。体のまわりには、ずたずたに引き裂かれた荷物が散らばっている。

「魔物に襲われたわけじゃなさそうよ。ならず者にお金を盗られたんでしょうね」
「ああ。かわいそうにな」
「かわいそう？」
アリスはぽかんと口をあけた。そして笑い出す。
「あははは。アリスちゃん呆れちゃう。この人が弱かったから、非力だったからいけないの」
「アリスちゃん。そんな言い方……」
なによ、とアリスはデクスを睨んだ。
「ヴァンガードに入るですって？　門も叩かないうちにこーんな家の近所で死んじゃって。自業自得ってだけじゃない。私なら、絶対こんな無様なことにはならないわ」
「とにかく戻って宿に報せなくちゃ。いっそ担いで行ったほうが早いかな」
デクスはその場にしゃがみ込み、散らばっている荷物の残骸を寄せ集め始めた。アリスはそれをじっと見ていたが、
「デクス。そんな男のことなんかほっときなさい」
と言う。
「え、でも……」

「いいから！　私の言うことがきけないの？　急いでるのよ」
「わかったよ」
デクスは肩をすくめ、集めた荷物をぽいと捨てて立ち上がった。
「急いでるってアリスちゃん、どこかへ行くのかい？」
アリスは強い瞳をまっすぐにデクスに向け、
「たったいま決めたわ。私はもっと強くなるの」
と、自分に言い聞かせるように頷いた。
（そうよ。このまま旅を続けていても、私が手にする〝力〟には限りがある……）
アリスが、より強大な〝力〟を得るために選んだのは——死んだヘンリーが夢に見ていた——シルヴァラント解放戦線ヴァンガードへ所属することだった。

第四章

牧場跡から自分がとってきたエクスフィアを使って、魔物を使役する機械をアリスが完成させたとき、デクスは今さらながら彼女がハーフエルフ特有の高い知性を持っていたことに驚いた。

エクスフィアをどう使ったのか彼には皆目わからなかったが、生け捕った魔物の身体につけると――大抵は首輪、あるいは尻尾に結んだリボンの中に隠している――、たちまち従順な愛玩動物のようになってしまう。

洗脳された魔物たちは、操っていない他の魔物と戦うとき、気に入らない人間を脅かすとき、そして移動手段としても最高の力を発揮した。

アリスは自分の使役する魔物たちを「ペットちゃん」と呼び、その数を増やすためにひとつでも多くのエクスフィアを欲しがった。

シルヴァラント解放戦線ヴァンガードの拠点に向かう途中で、デクスは、

「アリスちゃん、本当にヴァンガードなんかに入るのかい？」
と、どうもしっくり来ないという口調で訊ねた。
パルマコスタでのことだった。
「そうよ。だって私、気づいたんだもの。〝力〟は新たな〝力〟を生む。私が魔物を操る力は、それを恐れ敬う人間たちのことも操ることができるはずなの」
「それはそうだろうけど……」
デクスは、アリスが普通の人間たちが所属しているヴァンガードに進んで関わろうとしていることに、どうしても納得がいかないのだった。アリスはそんな彼の心配を見透かしたように、
「大丈夫。私のこと知ってる人なんかいないわ。私は魔物と契約している人間の女の子としてヴァンガードに入るの。わかった？」
と、説明する。
「そうか……それならいいんだけど」
デクスはほっとした。差別を受けなくてすむというなら問題はない。
「じゃあ、オレも一緒に入るよ」
「え～。あんたなんか入れてくれるかしら」

アリスはけらけらと笑い、
「うそうそ。あそこは来る者は拒まずですって。シルヴァラント人ならとりあえず誰でもいいのよ♡」
と、手にしていた鞭をペチペチと鳴らした。

アリスの言った通り、ヴァンガードはすんなりとふたりを受け入れた。
ちょうど拠点にいた総帥のブルートの前で魔物を呼び出し、思い通りに動かして見せたのだから当然と言えるだろう。
「どうかしら♡」
余裕たっぷりに笑ってみせるアリスに、その場にいた構成員たちからため息が漏れた。
ブルートは両手を広げ、
「素晴らしい！　ぜひシルヴァラント王朝復活のために力を貸してもらいたい」

と、感動を現すと、あとのことをタームスという当時のパルマコスタ拠点の責任者に任せ、忙しそうに視察に出て行った。

タームスはアリスを戦闘班、デクスを工作班に振り分けた。そして、各班との顔合わせはもちろん、手際（てぎわ）よく宿舎の手配までをすませてくれた。

デクスは最初、アリスと同じ戦闘班に入りたいと騒いだが、「工作班ならエクスフィアを手に入れるのに有利かもしれないでしょ？　いまはガマンしなさいよ」とアリスが言い含めた。

アリスは、いずれ自分がこのよく組織された集団で認められることを想像するだけで、わくわくしたのを覚えている。

ヴァンガードは新興勢力だけに、いくらでも人手が欲しいようだった。たいてい誰でも入れてしまうので、飢えることがないからという理由だけで集まってくる者も多い。

しかしヴァンガードに入ってすぐ、アリスは無視できない人物――やがてはアリス自身の運命に大きく関わってきた――ふたりと出会うことになった。

ひとり目は、マルタ・ルアルディという名の少女だった。
その日、アリスが拠点の建物に入ると、総帥の部屋から複数の笑い声が聞こえてきた。
（変ね。ブルート総帥は出かけてるはずなのに……）
総帥の留守中に勝手に部屋に入ることは、もちろん許されていない。アリスが不審に思っていると、部屋のドアが開いて中からひとりの少女が出てきた。数人の構成員たちに囲まれるようにしてこちらに歩いてくる。
「マルタさま、総帥がお帰りになられたら驚きますよ」
「そうかなあ」
マルタと呼ばれた少女はまんざらでもなさそうに首を傾げる。
「本当に、今日のお弁当はいつにも増しておいしそうです」
「うん。私もよくできたなあって思ってるの。パパ、早く帰って来ないかな」
（パパ……？）
「あっ、アリス」
男のひとりは同じ戦闘班だった。アリスを見つけて片手をあげる。

「ちょうどいい。こちら、ブルート総帥のひとり娘でいらっしゃるマルタさまだ」
「……」
(総帥の娘、ね……。なんの苦労もしてなさそう)
アリスは密かに思う。
「マルタさま、こっちが最近入ったアリスです」
マルタはアリスを見ると、にっこりと笑った。
「こんにちは、アリス。はじめまして」
「……はじめまして」
「一緒にがんばろうね」
「!? え、ええ……」
(ウソでしょ。この娘もヴァンガードに入ってるの!?)
アリスはお嬢様然としたマルタに、思わず無遠慮な視線を走らせる。ひらひらした服を着、長く伸ばした髪は膝近くまであるだろうか。およそ実戦向きには見えない。
「あっ! そうだ、ねえねえ、クッキー食べない? 私が焼いたんだ～」
マルタはごそごそとバッグからクッキーが入っているらしい紙袋を取り出すと、
「パパの部屋で食べていいよね?」

と、アリスの袖を引っ張って廊下を戻り始めた。
総帥の部屋に入ると、マルタは慣れた様子でお茶を煎れ、アリスにすすめる。
「いつも総帥にお弁当を作って来るの？」
総帥の執務机の上の巨大な弁当包みに視線を当て、アリスは訊ねた。
「ううん。パパがパルマコスタにいて、私の気が向いたときだけ」
「じゃ、他の日はなにしてるの？」
「いろいろ、かな。おうちでお花を育てたり、ママに習ったお料理したり。あ、でもここではいちおう戦闘の訓練もしてるよ。疲れたらここへ来て、おやつ食べて、パパやみんなとお喋りするの」
「へえ」
アリスは気がなさそうに応えた。
(あら？　なんだかこういうの聞いたことがあるわよね)
「……どうしたの？」
マルタは無邪気にアリスの顔を覗き込みながら、左右につけている髪飾りの位置を直す。大きな白い花を象ったそれは、実は、一年前に死んだ母親の形見だった。
「ううん。あのね、マルタちゃんが誰かに似てるなぁって思って……誰だったかしら」

「本当？　アリスのお友だち？」
「うーん」
わかった、とアリスは言葉には出さずに思った。
（『お姫様の優雅な一日』に出てきた世間知らずのお姫様だわ）
ずっと以前、ルインの街でステラが買ってくれた絵本をアリスは思い出した。
（毎日毎日お城で暮らして、家来（けらい）がいっぱいいて、女王様とバラの世話をして暮らしてるお姫様の話……）
あれはロビンの家を出るときにステラの本棚にそっと押し込んできてしまったのだった、とアリスは思い出した。
マルタは紙袋の封を破り、満足そうに中身を覗き込んでいる。
「ねえ、クッキー食べて」
「……ええ」
マルタはざらざらと皿にクッキーをあけてアリスに差し出す。形も不揃いなら、焼き色もさまざまだ。
ちょっと固そうだなと思いながら一枚口に運ぶと、
「っ⁉」



得体(えたい)の知れない味が口いっぱいに広がる。
あまりのまずさに、もう少しで吐き出しそうになった。それでもなんとか飲み下して、
「私、仕事があるから」
と立ち上がると、マルタは残念そうにアリスに無理矢理クッキーの残りを持たせた。
アリスがひとりで廊下に出たとき、デクスが――本人にとって不幸なことに――廊下の向こうからやって来た。
「デクス！　いいところで会ったわ。はい、これあげる。食べて」
クッキーの包みを受け取ったデクスは目を丸くし、
「うわっ、アリスちゃんの手作りクッキー⁉　オレのために……うれしいよ！」
と、とろけそうな表情になった。がさごそと包みに手を突っ込む。
「早く食べなさいよ」
「うん。いい焦げ具合だね。それじゃ…………ぐっ⁉」
デクスの両目が寄った。
「うふふ。総帥のお嬢さまの手作りですって♡　パパへの愛情たっぷりなんじゃない？」
「ず……ずごい塩味……み、水……っ」

走り去るデクスの背中を見ながら、アリスは笑った。笑いながら、あの娘はなんの苦労もなく生きているのだろうな、と思った。

大勢の取り巻きたちにちやほやされて、ひとりで何もできなくても支障のない人生。きっと危なげない道を歩いていくのだろう、と。

だからのちにマルタが、あんなに慕って甘えていた父親を裏切ったときには驚いた。ブルートが大切に保管していたラタトスク・コアを盗み出したのだから。アリスは詳しい事情を知らなかったが、お姫様も自分なりの行動を始めたのかとほんの少し見直した気持ちになりかけた。

けれど結局ラタトスク・コアを額に宿したマルタが、ラタトスクの騎士であるエミル・キャスタニエや闇のセンチュリオン、テネブラエの力を頼みにして生きているのを見たとき、やはり彼女は自分とは相容れない存在なのだと痛感したのだった。

ふたり目の名は、リヒター・アーベント。

いた。
た。隠そうとしていなかったのか、ヴァンガードの構成員の相当数がそのことを知っていた。
眼鏡(めがね)の奥に冷たい瞳(ひとみ)を光らせ、赤い髪を長く伸ばした彼は、ハーフエルフの青年だった。隠そうとしていなかったのか、ヴァンガードの構成員の相当数がそのことを知っていた。

さらに驚いたことは、リヒターが魔族と契約を交しているという事実だ。

初めて拠点ですれ違ったとき、アリスは彼が発している独得のものを感じ取った。それはかつてアリスがなくしてしまった、契約による〝力〟の匂いだった。おそらくリヒターのほうもアリスに同じものを感じたに違いない。

彼はあまり自分のことを語りたがらなかったが、デクスに情報を集めさせてみると、彼がかつてサイバックの王立研究院の地下で強制的に研究員として働かされていたことがわかった。

（この人も私と同じ差別を受けて虐(しいた)げられてきたんだわ——）

アリスは最初ちょっとした連帯感のようなものさえ抱いたのだが、リヒターはそんな感情は持ち合わせていないようだった。彼は、理由はわからないがラタトスク・コアを額に宿すマルタの命を狙い、神子の輝石(きせき)を探し求めるという明確な目的を持ち、そのために冷徹を貫いていた。

ヴァンガードに入ってからひと月もしないうちに、アリスは戦闘班のリーダーになっていた。それまでリーダーだったホークを完膚(かんぷ)なきまでに叩きのめしたからだ。それ以来、ホークはアリスには絶対服従を誓っていた。

デクスのほうも、半年ほどたって工作班のリーダーとして認められた。アリスの昇格に刺激されて発奮したのだろうが、前任者との間に何かあったのかどうかは、彼女は聞かなかった。

あれは、戦闘班のリーダーになって間もないころ、初めての遠征のときだった。アリスは世界再生後のある街を通りかかり、子供の泣き声にふと足を止めたことがある。

「イヤだよ〜、まだあそびたい！」

「いけません。言うことを聞きなさい！」

買い物を済ませて食料品店から出てきた母親が、小さな男の子の手を乱暴に引っ張っているのだ。

まだ日は高く、急いで家路につかなくてもよさそうな時刻だった。
「帰るったら帰るの。さっさとこっちへ来なさい！」
男の子のすぐ近くには、同い年くらいの子供が二、三人かたまって立っていた。彼らを見て、アリスは微かに眉を顰めた。
テセアラ人の親子が贅沢な身なりをしているのに対して、ほかの子供たちは明らかにみすぼらしかったからだ。
「ママをまってる間に友だちになったんだよ。どうしてあそんじゃいけないの？」
男の子が濡れた目で母親を見上げると、
「どうしてですって？　決まってるでしょう。よく見てごらんなさい、このシルヴァラント人の子たちの汚いこと！」
彼女は蔑みの口調で応え、子供たちのほうを顎でしゃくった。
「きたなくなんかない……友だちになったんだ……」
男の子が口の中でつぶやくのに耳も貸さず、母親は子供たちに向き直ると、
「あなたたち、どうせいま私が買ってきた食べ物を狙っているんでしょう？　ろくなもの食べてないような顔ばかりだもの、わかるわ。でも、うちの子に取り入ったって無駄よ。しっしっ！」

と、犬でも追い払うような仕草で子供たちを遠ざけた。傷ついた表情の子どもたちの横顔を見たのを最後に、アリスはつんと顔を上げて再び歩き出したのだった。

世界再生で大地が統合されたことによって、シルヴァラントとテセアラは距離をなくした。だが、いったい何が変わったというのだろう。

（まったく……。再生の神子なんかが出てきて、どんなにいい世界になるのかと思えば……）

もとからあった差別の種が一気に芽を吹いただけじゃない、とアリスは思う。

（そういえば、前に神子を見たことがあったわよね）

アリスはデクスとの禁書探しの旅の途中で、再生の神子であるコレット・ブルーネルがロイド・アーヴィングや仲間たちと一緒にいるのを見たことがあった。シルヴァラントの人々はコレットたちを遠巻きにし、「神子さまだ」「これで世界も救われる」と、泣かんばかりにありがたがって囁き交わしていたものだった。

アリスはでも、コレットの姿を目にしたとたんに拍子抜けしてしまったのを覚えている。

（なぁんだ。神子（コレット）って、ただの女の子じゃないの）

小柄で童顔、特に厳（おごそ）かな感じがするわけでもない。

たのだった。
神子が自分と同じ少女であることを目の当たりにするうち、アリスの心は苛立ってきたのだった。
取り巻きに囲まれている者を見ると嫌な気持ちになるのは、ハイマの孤児院の息子スカイを思い出すからかもしれない。コレットもまたアリスにとっては、嫌悪の対象のひとりとなった。おかげで、世界再生で大地があるべき姿に戻ったのだと頭ではわかっていても、アリスは——その際の激しい天変地異にさえ——どこか関心を払いきれずにいたのだった。
考えようによっては、両親の命を奪った、あのいい加減なマーテル教によって祭り上げられたコレットに比べれば、エセ宗教を排除しようとしているヴァンガードのマルタのほうがまだずっとましなのかもしれない。
(しょっちゅう顔を合わせなきゃならないのはとーっても嫌だけど、まあいいわ。お姫様が私をおびやかさない限りは、無視していてあげる)
それでもやはりアリスはマルタが大嫌いだった。
その後、貧しいシルヴァラント人がテセアラ人にひどい仕打ちを受けることはますま

す増え、アリスたちヴァンガードは多忙になった。

ヴァンガード総帥のブルートは、マーテル教とテセアラ人に対抗するために八百年前に栄えていたというシルヴァラント王朝の復活を目指していたが――ブルート自身が王家の血を継いでいるらしかった――、ヴァンガードの組織が出来上がってからはもっぱらセンチュリオン・コアの収集に熱を上げていた。マルタの連れているテネブラエも、そのコアのひとつから孵化(ふか)した闇のセンチュリオンだ。

このコアを巡る騒動に、デクスが巻き込まれてしまったことは、アリスにとっては誤算だった。

世界再生で名をあげ、英雄と呼ばれているロイドに化けて殺戮(さつりく)を繰り返す――その危険な任務に工作班のリーダーの地位にいるデクスがなぜつくことになったのかアリスは知らない。

(どうせまた誰かに体(てい)よくおしつけられたんじゃないかしら。私はエクスフィアを探してほしいのに困ったものよね)

アリスはそう思っていたが、

「アリスちゃん。オレのことが好きになって困っちゃうくらい、カッコよく活躍してくるからね！」

いつもの軽い調子で拠点を出て行くデクスは、たぶん任務の内容についてはあまり深く考えていなかったのだと思う。

彼は、世界的企業であるレザレノ・カンパニーの通信販売――ルインでロビンに話を聞いて以来ずっと憧れは続いていたらしい――で取り寄せた香水メロメロコウを文字通り浴びるようにつけ、すごい臭気を漂わせていたが、それもただただアリスに振り向いてほしかったからに他ならない。

だからこそソルムのコアでロイドに変身する任務を引き受けてしまったのだろう。

デクスの留守中、彼の部下が「デクスさまの部屋に掃除に入ったら、『しぐさの研究――カッコいいポーズ――』っていう本があってさぁ」と、仲間に話しているのを聞いたことがある。アリスは彼が他にも筋肉強化マシンをはじめ『想いが叶うグッズカタログ』から何点も注文していることや、新部門のレザレノ神秘ネットが発行する会員誌を取り寄せていることも知っていた。

メロメロコウの臭気を漂わせ、暗黒邪神剣ゴールデンドーンを忍ばせた巨大なアイアンメイデンをずるずる引っ張って歩く様を見て、アリスはデクスの必死さを認めこそしたが、やはり彼を信じきることはできなかった。

（人間なんて、いつハーフエルフを忌み嫌って虐げるかなんて、わからないもの）

そう、自分に言い聞かせていた。

デクスを信じていないと、彼に直接言ってしまったこともあった。
あれはヴァンガードの任務の合間に、ふたりで崩壊した牧場に忍び込んだときのことだった。
探せど探せどエクスフィアは見つからない。
（もう。私の部下たちだってひとつやふたつ拾ってくるのに）
「ない～、おぉーっと、ここにもない～」
地べたに這いつくばり、いちいちポーズを決めながら瓦礫を掘り返しているデクスを見下ろしているうちに、アリスはだんだん腹が立ってきた。
「もう今日はいいわ」
さっさと牧場の門から出たところで、デクスが後ろから追いついて前に回りこむ。

「アリスちゃん。ごめんよ。エクスフィアを見つけられなくて……」
大げさな身振りで謝るデクスに、アリスはあわてて背後へ飛びすさった。
「ちょっとぉ、あんた３Ｋなんだからあんまり近づかないで！」
するとデクスはにやけ、
「アリスちゃん。そんなに誉めないでよ。照れちゃうよ～」
と、頭をかいた。
「誰があんたのこと誉めてるのよ」
「……アリスちゃん」
アリスはムッとし、
「いつ誉めたっていうの？」
と、問いを重ねる。
「だって、ほら、いつも３Ｋって言ってくれるじゃないか」
（え……？）
たしかにアリスは少し前から彼を『３Ｋデクス』と呼んでいる。
「あんた、それ誉め言葉だと思ってたの？」
「誉め言葉だろ？　クール！　カッコいい！　輝いてる！」

ばか、とアリスは思わず罵った。
「キモい、キショい、クサいの３Ｋよ。それにクールってＫじゃなくてＣでしょ」
Ｃ、Ｏ、Ｏ、Ｌ、と宙に書いてみて、
「あぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!　そ、そうかあっ！」
デクスは頭を抱えた。もうひとつＫで始まる誉め言葉を考えてみたが、思いつかない。
「それよりエクスフィアよ。あれがないとペットちゃんの数を増やせないじゃない」
ため息をついたアリスは、
「あと十個はほしいのに……」
と、唇を尖らせる。
デクスは誉め言葉を考えるのをあきらめると、そっと一歩前へ出た。
「……ねぇ、アリスちゃん。もうそんなに力にこだわらなくていいんじゃないかな」
「なんでよ」
アリスはデクスをキッと睨みつけた。
エクスフィアの洗脳マシーンで操れる魔物もたくさん集めたし、ヴァンガードの戦闘班のリーダーにもなったし、なによりオレがいるし。デクスの頭の中には一瞬で返答が浮かぶ。だがそれを伝える暇はなかった。

「あんたには子供のころから何度も話したでしょ。私の両親が、どうして死んだのか」
デクスは頷く。
「聞いたよ。マーテル教の教えに従って旅業に出て、魔物に襲われて、殺された……」
「そう。あのふたりは力がなかったから……。私はあんなふうになりたくないの」
両親の血でまっ赤に染まっていた白い花の群生が脳裏に浮かび、アリスは顔をしかめた。
「あんただって力がなかったから、ハイマの孤児院でいじめられたんじゃない」
今度はデクスが痛みを思い出す番だった。スカイやジャグたちから毎日いいように使われ、最後には冒険者たちに殺されそうになった——。
孤児院の建物が潰れるときの音は、いまだに耳に残っている。
今思えばあれは、幼かった自分の悲鳴のように聞こえていたのかもしれなかった。
「けど……今ならオレだって強くなったよ。エクスフィアをもらったし」
デクスはエクスフィアを装着している片手をちょっと上げてみせる。
「アリスちゃんが無理しなくても、オレがアリスちゃんのナイトになるのに」
「下僕の間違いでしょ」
辛らつに言い、アリスは鼻で笑った。

「それでもいいよ」
デクスも動じない。もとより残りの命はアリスに捧げると決めている。
「……私は誰かに頼るのは嫌なの」
焦れたようにアリスは言い放った。
「あんただって人間だもの。いつハーフエルフを化け物扱いして裏切るかわかんない」
その瞬間、デクスは心外そうに目を見開き、
「オレはアリスちゃんを裏切らないよ」
と、訴えた。
「私は自分しか信じないの」
アリスはデクスの脇を擦り抜けて走り出す。
(信じない。デクスの言うことなんか信じない……！)
なにも間違ったことは言わなかったはずだ。それなのに、アリスの心の中ではなにかが引っかかっていた。

——ねぇ、アリスちゃん。もうそんなに力にこだわらなくていいんじゃないかな。

デクスの言葉が何度も頭の中で繰り返される。
(こだわらなくていいはずないじゃない！)
「アリスちゃん、待ってよ！　アリスちゃ～ん！」
はるか後方から、追いかけてくるデクスの声がした。ひどく悲しそうに聞こえる。
面と向かって「信じない」とは、言いすぎただろうか。
(そんなことないわ。だって本当のことだもの。デクスだってほかの人間と同じよ！)
だからこそ〝力〟が欲しかった。デクスがいなくなっても、ひとりになっても大丈夫な〝力〟が欲しかった。
だから、デクスに「もうそんなに力にこだわらなくていいんじゃないかな」と言われて反発した。でも……一体自分はなにをしたかったのだろう。
どんなに強大な〝力〟を得たとしても、初めて魔物と契約したときのあの気持ち、〝力〟を持った瞬間の幸福感はもう二度と訪れてくれなかったというのに。
いま思えば、ずっとアリスだけを見てきたデクスだからこそ、あのとき何かを感じとっていたのかもしれなかった。

アリスは、自分はデクスを利用しているだけなのだと信じていた。たまたま同じ孤児院で出会い、そのあとは腐れ縁でここまできただけなのだから、せいぜい使ってやるのがいいだろうと本気で思っていたはずだった。

しかしソルムのコアのせいでデクスの言動がおかしくなることが多くなったとき、アリスは自分が不安な気持ちになっていることに驚いた。

（センチュリオン・コアは人間の心を凶暴で残忍なものに変えてしまうらしいけど……一度医者に診せたほうがいいかしら……）

デクスを使えなくなるのは困る。これ以上任務が続くようなら、知り合いのフラノールの医者のところへデクスを連れて行こうと思っていた。

そんなある日、テセアラのメルトキオ王宮広場でアリスはひとりのシルヴァラント人の老婆がマーテル教の祭司をよろよろと追いかけているのに出会った。

老婆は広場を横切ろうとしている祭司の背中に、

「お待ちください！　孫が病気なんです！」

と泣かんばかりに繰り返している。

アリスはデクスを伴って歩いていたところだったが、いかにもうさん臭く見えるマーテル教の祭司を目にし、素通りできず立ち止まった。
「テセアラのお医者さまなら治せるだろうと言われてるんです！」
老婆の訴えに、祭司はうるさそうに、
「だからなんだ、シルヴァラントの小汚いババァが」
と吐き捨てた。
その騒ぎに、暇を持て余しているテセアラの貴族たちが遠巻きに見物を決め込んでいる。老婆は必死で説明を始めた。
「テセアラのどこのお医者さまもメルトキオの教皇さまに紹介状を書いてもらわなければ、シルヴァラント人は診ないと仰しゃって……」
「知るか！」
祭司が一喝すると、老婆はびくりとして口をつぐんでしまう。
「シルヴァラントの蛮族など、シルヴァラントのヤブ医者にでも診てもらえばいい。そこをどけ！」
「あっ！」
思い切り蹴り飛ばされて、老婆は広場に転がった。ぶざまな格好に、貴族たちから下

卑た笑い声が上がる。
「見ろよあのババァ」
「まるで貧民街のゴミと同じ臭いがしますわ」
アリスが彼らをじっと見ていたところへ、驚いたことにマルタがエミルたちと一緒に通りかかったのだった。マルタたちもいきさつを見守っていたらしい。
「な……なんなの、あいつら！」
いきりたつマルタのそばにはエミルのほかに、リーガル・ブライアンと藤林しいなもいた。アリスはさっと物陰に身を隠し、魔物を呼ぶ。
「大丈夫ですか」
エミルが駆け寄り、老婆を助け起こす。
「ちょっとあんた！　酷いじゃない！」
「うるさい！　マーテルさまの天罰が下るぞ！」
祭司は抗議するマルタを怒鳴りつけた。
アリスは現れた魔物に、祭司を脅かすよう命ずる。
祭司がなおもマルタを怒鳴り続けようと口を開いたとき、魔物が跳んだ。
「うわっ⁉」

尻尾に結んだリボンの中に仕込んである機械で、魔物は完全にアリスの言いなりだった。祭司を押し倒し、恐ろしい唸り声を上げる。
「あらら♪　天罰下ったみたい♡」
アリスは笑いながら広場の中央へと進み出た。マルタたちがハッとするのが見えたが、かまいはしない。魔物は鋭い爪を出し、祭司の顔を引っ掻く真似をしてみせると、貴族たちが逃げ惑う広場を抜けて走り去った。
「な、何をする！」
祭司は怒って拳を振り上げた。
「あら、マーテル教なんて腐ったエセ宗教振りかざして偉そうにしてるから、天罰を食らわせてあげたのよ♡」
「な、何……」
アリスは鞭をペチペチと鳴らすと、
「マーテル教会が何をしてくれるのよ。うちの両親を生き返らせてくれるの？　無理矢理教会の旅業に出されて魔物に襲われて死んだお父さんたちを」
と、低くつぶやいた。
「そ、そんなことで逆恨みしているのか！　恐れを知らぬ小娘め！」

ようやく上体を起こした祭司が罵ると、それまで黙ってアリスの隣に立っていたデクスの顔色が急に変わった。
「こぉのやろぉぉぉおおぉ！　アリスちゃんになんてこといいやがるぅぅぅううぅぅぅっ！」
硬いブーツが祭司の横腹に埋まる。
「ぐぅっ⁉」
デクスは、再びその場に倒れた祭司を、蹴って蹴って蹴りまくった。
「うふふふふ」
アリスが可愛らしい笑い声をあげる。
「勘違いしないで。力がないからうちの両親は死んだの。もちろん、力がないからあなたもここで死ぬのよ。それだけ♡」
デクスの目に残忍な光が宿った。ただひたすらに蹴り続ける。祭司はもうものも言えず、抵抗する気力もなくなったと見えてぐったりしてしまっていた。
「ちょっ、ちょっとデクス！　やめなよ！」
見かねたマルタが叫んだ。あたりは異様な雰囲気に包まれている。
「も、もういいです。どうかそれ以上は……」

老婆が哀願しなかったら、アリスももう少しそのままにしていたかもしれない。
「あら、おばあちゃんに救われたわね。デクス、もういいわ♡」
「……」
肉を蹴る鈍い音だけが繰り返される。
(デ……クス?)
「も、もういいって言ってるでしょ!」
アリスはようやくデクスがおかしくなっていることに気づき、あわてて顔を覗き込む。
焦点の合わない目の下で、彼はたしかに笑みを浮かべていた。
エミルが今度はデクスの方へ駆け寄ったが、途中から前へ進めなくなり、くるりと背を向ける。
「そ、そうだよ! デクスおやめよ!」
しいなもエミルとほとんど同時に祭司を助けようと近づいたのだが、ぴたりと足が止まってしまう。
「す、すごい臭い……」
エミルが、鼻と口を覆ってその場にしゃがみ込んだ。
「メロメロコウか……。く、頭が……痛くなる」

リーガルは臭いの元が自社製品をつけているデクスだと気づいたものの、頭を抱えてやはり動けない。

アリスは不安に襲われ、

(デクス……!?)

思わず叫んだ。

「デクス!! やめてっ!」

その声が、やっとデクスの耳にまっすぐ届いたようだった。彼の目からフッと邪悪な光が消える。

「……あ……お……オレ、な、何を……」

デクスは明らかにうろたえていた。自分が何をしていたのかよくわかっていなかったらしい。

「……デクス、行くわよ」

アリスが促したが、

「あ、でもアリスちゃん、マルタたちが……」

デクスはマルタ一行を認めて動こうとしなかった。マルタの額に寄生(きせい)しているラタトスク・コアを手に入れる絶好のチャンスだからだ。

「それどころじゃないわよ！　あんたがそんな制御不能じゃ心配じゃない」
「アリスちゃん！　オレのこと心配してくれるの⁉」
デクスは心配という言葉に反応して、でれでれした。
「アリスちゃん自身が心配なの。あんたなんてどうでもいいわよ」
アリスは自分に言い聞かせるように言い、先ほどから心細そうにしている老婆に目をやった。
「それから、おばあちゃん。お医者さまならこのヴァンガードのアリスちゃんが紹介してあげるわ♡」
えっ、と老婆の口から小さな声が漏れる。
「私の名前を出してフラノールの医者を訪ねてみて。無料で診てくれるはずよ♡」
「あ、ありがとうございます。アリスさま……」
感激した老婆は地面に額を擦りつけんばかりに平伏し、それから指を組んでアリスを拝んだ。
広場を出てゆくとき、目を丸くしてこちらを窺（うかが）っているマルタの顔がちらりと見えた。
（ふん。どうせ『アリスが人助けするなんて珍しい』とかなんとかみんなと一緒に笑うんだわ。ヴァンガードはあんたのパパがシルヴァラント人を救う目的で作ったんだから、

間違ってないでしょ）
　それよりデクスよ、とアリスは思う。
「３Ｋのうえに制御不能だなんて、サイテー」
「ごめんよ……」
　デクスがうなだれた。そんなデクスの姿を見て、アリスはふと思った。
（もし私がヴァンガードに入ると言わなければ、デクスはこんなことにはならなかったかしら……）
　淡い後悔がアリスの胸に去来する。が、すぐに、
（でもデクスは頼みもしないのに好きでついてきたんだし、私が責任感じることはないわよね）
　と、不安を打ち消すように思い直した。

やがて、ヴァンガード総帥のブルートが、デクスからソルムのコアを取り返したことによって、アリスの心配は薄れた。デクスはしばらくは禁断症状でおかしかったものの、やがてコアの影響は消えていったのだ。以前と同じようにアリスに接するようになったデクスに、アリスは口にこそ出さなかったが、心底ほっとしたのだった。

そんなおり、リヒターが契約している魔族が、ギンヌンガ・ガップにある魔界の扉を開こうとしているという情報を、アリスは手に入れた。

（扉が開けばこの世界は魔物だらけになる……。マルタちゃんたちってば、リヒターを絶対止めに行くわよね。おもしろいことになりそう♡）

デクスにも伝えておかなくちゃ、とアリスは思った。

数日後、パルマコスタの総督府近くで、アリスはエクスフィアの収集に行った部下たちを待っていた。ギンヌンガ・ガップへ行くために、手持ちのペットを補充しようと思ったのだ。本当はデクスにやらせるつもりだったのだが、どこへ行ったのか彼の姿は見当たらなかった。

風は穏やかで、海に目をやってみても、今日は波もほとんどない。
(きれいねえ……)
太陽に煌めく海面を見つめているうちに、アリスはハッとする。ぼんやり海を眺めているような隙が自分にできたのが心外だった。一体なぜだろう。
(このアリスちゃんに迷いでもあるってこと？　そんなわけないわ)
そのとき、部下がふたり戻ってきた。
「アリスさま。これがここに残っていたエクスフィアです」
最近知ったのだが、世界再生後、神子コレットとロイドはふたりでエクスフィア回収の旅に出ていたらしい。道理で、ありそうな場所になかったはずだ、とアリスは思った。
(先を越されてたわけね。コレットちゃんたら、ほんとにいちいち頭にきちゃう……)
そんなことを考えながら、アリスは部下からエクスフィアを入れた袋を受け取り、
「それじゃそろそろ戻りましょうか」
と、先に立って歩き出そうとした。そのとき、マルタを先頭に彼女の仲間たちがやって来るのが見えた。
エミル、しいな、ロイドとコレット。そしてハーフエルフの姉弟であるリフィル・セイジとジーニアス・セイジ。

また面白くないのが来たわね、と思いながら、
「あら♡　みんなに迷惑かけてばっかりのマルタちゃん♡」
アリスは皮肉たっぷりにマルタに挨拶（あいさつ）した。そうしている間に、テセアラの神子ゼロス・ワイルダーとリーガル、さらにはプレセア・コンバティールまでもが集まってきた。
「それはおまえのほうだろ！」
エミルがマルタをかばってアリスに言い返す。
「ふーん。ペットちゃんもなかなか言うようになったじゃない」
アリスは感心してみせ、
「ま、ペットちゃんには力があるものね♡」
とにこやかに頷いた。
「力……？」
エミルが不思議そうに首を傾げる。自分の体の中にとてつもない力を持っているのに、ピンときていない様子だった。
〝力〟を欲しているわけでもないのに周りから与えられた者の傲慢さを、アリスは呪ってやりたい気持ちになる。再生の神子たちにしてもそうだ。
「力よ、力。ラタトスクの力。精霊だなんてすごーい。アリスちゃん感動♡」

「……キミは、ハーフエルフとして差別されていたから、力がほしいの？」
にこりともせずエミルが訊ねた。
「どういう意味かしら？」
「それとも魔物に殺されたご両親のために……」
「うふふ、ばかみたい」
アリスはエミルを遮る(さえぎ)と笑いだす。
「ずいぶんいろんなこと知ってるのね♡」
アリスはエミルたちの顔を順番に見ながら続けた。
「でも、私、別に差別されたことを恨んでなんていないし、両親の仇(かたき)とかそんなことも考えてないのよ♡」
「そ、そんな強がらなくても……」
マルタが口をはさむ。
(もう、マルタちゃんにだけは言われたくないわ)
「強がってるのは力のないマルタちゃんの方でしょう？」
言い返すとマルタが言葉を詰まらせた。
「そりゃ、マーテル教会もお父さんたちを殺した魔物だって嫌いよ。でもね、結局そん

な世界を変えたかったら自分が変わるしかないのよ」
これまでの私の生き方をこの人たちにどう説明してあげれば理解できるのかしら、と考えながら、アリスは簡潔な言葉を選ぶ。
「世界が私に不幸を押しつけるなら、私が世界に不幸を押しつける。それだけよ」
聞いたとたん、
「そんな酷いこと言わないで」
コレットが両手をぎゅっと握りしめる。
「自分が変われるって思うなら、あなたの強さをみんなに分けて……」
「もう、コレットちゃんたら、ぎ・ぜ・ん・しゃ♪」
(言うと思ったわ、あなたならね)
アリスが笑うと、
「！」
シルヴァラントの神子はショックを受けた様子だった。
「おまえっ！」
気色(けしき)ばむロイドを、
「いいのよ、別に。私、偽善も嫌いじゃないし」

とやんわり制してから、にこやかに話し続ける。
「知ってる？　偽善だろうとなんだろうと、人に優しくするためには強い力がいるのよ。だからコレットちゃんたちは力を持つ偽善者なの♡」
「……」
コレットたちは応えない。
「私、自分の力で何かをやれる人は嫌いじゃないわ。ねえ、ひとりじゃなにもできないマルタちゃん♡」
アリスが嫌味な調子で言うと、
「あんた……」
マルタがキッと睨む。その視線を軽くはずし、アリスはまっすぐに顔を上げる。
「私は、私を取り巻く世界を変える。自分の世界を変えるには、自分が動くしかない。――私は世界の平和だとか、シルヴァラントとテセアラの争いだとかそんなものはどうでもいいの」
まさに世界の平和のために、そしてシルヴァラントとテセアラの争いを終わらせることに心を砕いてきた十人を目の前にして、アリスは「うふふっ」と柔らかいとびきりの笑顔を作ってみせる。

「私は私のために生きてるんですもの。それじゃあね、ギンヌンガ・ガップで会いましょ～♡」
(あったまきた、強がってなんかいないわ。私は、本当に強いんだから。マルタちゃんたちに、見せてあげるわ)

ギンヌンガ・ガップは異界の扉――以前はテセアラとシルヴァラントをつなぐ場所だった――から続く魔界への通路だ。
魔族と契約しているリヒターがいま、魔界ニブルヘイムへ続く扉を開けようとしているはずだった。彼がここに入ったのを確認して、アリスとデクスはマルタたちを待ち伏せしている。リヒターを阻止しようとするマルタたちが、間もなく現れるだろう。
「ここらで待ってればいいんだな」
デクスがアイアンメイデンに片手をかけてポーズを決める。
ここまで来るのに思ったより時間がかかったのは、彼が言うところのラッキーグッズ

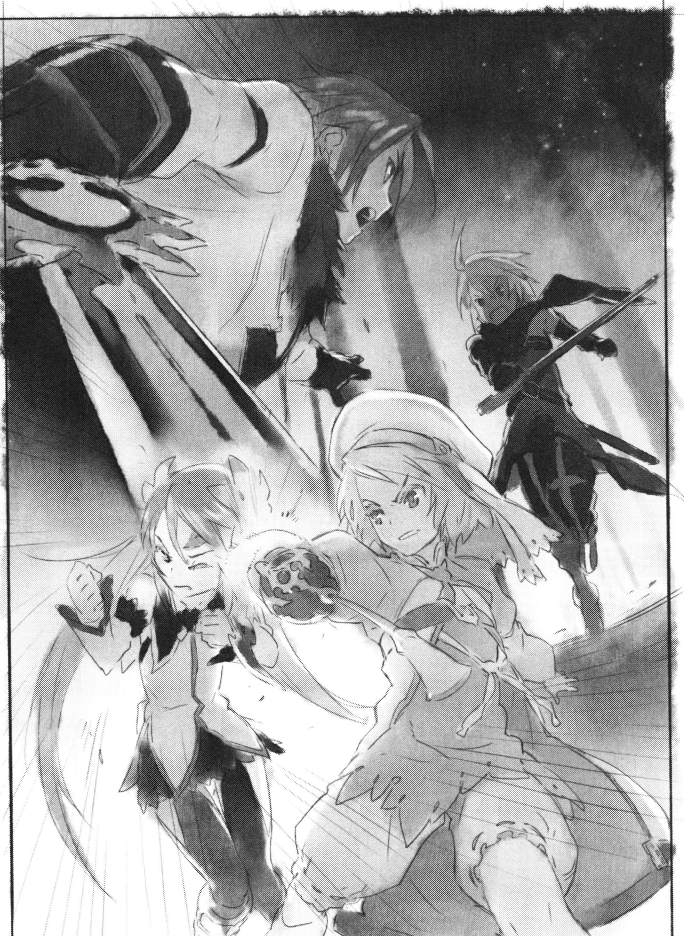
が重過ぎるせいだ。
「どうでもいいけどデクス、いつまでこれを担いでるつもり？　なにもこんなところまで……」
アリスは棺桶（かんおけ）型の拷問具を横目で見ながらため息をついた。
「だってアリスちゃん、今日が七六五日目なんだよ？　今日、オレの想いはかなう予定なんだ。それなのに持って来ないなんて考えられないよ！」
「……あらそう」
いつものことなので、アリスは気がなさそうに受け流した。やがて、
「ふふ……ふふふ」
デクスが下を向いて低く笑い出す。
「なによ、気持ち悪い」
「いや、ついいろいろ考えちゃって。このあとたとえば家かなんか持っちゃったりするのもいいかな、なんてね。ハイマ……ハイマなんかどう？」
「ハイマ？」
アリスは怪訝（けげん）そうにデクスの顔を見た。
「そりゃあんたがあそこに戻りたいなら勝手だけど、ハイマなんて遠いじゃない」

するとデクスは体をくねらせながら得意げに言った。
「だからさ。ちゃんと考えてあるんだよ。通勤にはほら、アリスちゃんの飛行系の魔物を使えばひとっ飛びじゃないか」
「ええっ、私も一緒なの⁉」
アリスはぽかんと口をあけた。
「あそこも魔物が減って、いいところになってるよ」
「！　あんた」
アリスはデクスを睨みつけた。
「アリスちゃんにエクスフィア探しを押しつけて、ひとりでハイマなんかに行ってたのね」
「お、怒らないでよ。アリスちゃんが安心して暮らせるところかどうか、下見に行っただけだよ」
「……」
（デクスったら、ほんとに私とずーっと一緒にいるつもりなの？）
アリスは呆(あき)れてしまった。
そのとき、微かな足音が聞こえてきた。

「！」
アリスはハッと身構える。
「アリスちゃん。あいつらが来たみたいだよ」
「わかってるわ」
絶対に私の〝力〟を見せてやる。アリスはしゃんと顔をあげ、前方を見つめた。
目の前に現れたのが大勢でなく、マルタとエミル、そして闇のセンチュリオンである
テネブラエだけだとわかったとき、アリスはうれしかった。
ラタトスクが嫌うデリスエンブレムを持っていたロイドたちは別の場所へ飛ばされて
しまっていたのだが、そんなことはアリスは知らなかった。ただ、マルタに勝って、言
ってやりたいことがあったというだけだ。
「ようこそ。魔物の墓場へ」
アリスはデクスと並び、鞭を鳴らしながらふたりを迎えた。アリスにむろん負ける気
はない。
(私の信念がただの強がりかどうか、見せてあげるわ)
アリスが鞭を構えると、デクスもアイアンメイデンの中から大剣を取り出した。
エミルの剣がアリスに挑みかかる。

「危ない、アリスちゃん！」
アリスをかばうデクスにはマルタのスピナーが襲い掛かった。その隙にもエミルの刃が幾度もアリスの眼前で煌めいた。
「きゃあっ!?」
(絶対、負けない！　ここまで自分の〝力〟でやってきたのよ。マルタちゃんなんかに……負けるはずがない！　私は強いのよ！)
アリスは自分を信じて、ただ戦い続けた。

——しかし、やがてアリスは倒れた。デクスも傷つき、呻き声を上げている。
(どうして……マルタちゃんなんて、ひとりじゃなんにもできないと思ってたのに……お姫さまが王子さまに会って成長したっていうこと……?)
「……マルタちゃん」
倒れ伏していたアリスは、マルタの名を呼びながらようやく体を起こす。エミルに斬られた傷は深く、肺をやられたのか呼吸が苦しい。
「アリス……」



「マルタちゃん、私……私ね……」

(言わなきゃ。ずっと言いたかったんだもの)

アリスは前かがみのままマルタに近づく。一歩、大きくよろけてみせる。

「アリス！」

案の定マルタは駆け寄ってきて、アリスの体を支えようと手を伸ばした。

(マルタちゃん、やっぱり甘い——)

アリスは上体を起こしざま、思い切りマルタの頬を叩いた。

「っ!?」

「あんたが大嫌い！」

(お姫様で何の苦労もなくて、能力もないのにちやほやされて！)

マルタを押し倒し、馬乗りになると、振り上げた鞭で打とうとした。

「や、やめろっ！」

エミルがアリスに向かって、手にしていた剣を横一文字に振り払う。

(きゃ)

思わず目をつぶりそうになったとき、

「ぐうっ……」

目の前でよく知っている呻き声がした。
（デ、デクス……!?）
アリスをかばって飛び出したデクスが、エミルに背中を思い切り抉られたのだった。
その両手が、がっちりとアリスの両肩を捉える。
ゆらゆらと揺れるデクスの瞳に、アリスは初めて懐かしさを見た。と、紫色に変わってゆく唇が、
「今日で……七六五日目……。今回も……偽物を掴まされた……かな」
震えながら微笑もうとする。
（デクス……）
デクスはアリスを見つめたまま、
「アリスちゃん……キモイって言われると思うけど……」
と、掠れた声を振り絞った。たったひと言、
「好きだったよ……」
デクスの言葉がアリスの耳に流れ込む。
それだけだった。彼はそのまま音を立てて仰向けに倒れた。
（うそ……）

「デクス！」

アリスは絶叫した。その瞬間、鎧(よろ)っていたものが弾け飛ぶ。

「――……私も……好きだったのに。ホントに……好き……だったのにっ！」

こんなはずではなかった。

（私は、マルタちゃんに「大嫌い」って言いたかった……でも、デクスは「好きだったよ」って……）

恐ろしい後悔がアリスの胸に広がった。今まで考えないようにしてきた一切のことが、アリスを真っ黒な闇に飲み込もうとしている。

（いま気がついた……。そう、私はデクスが好きだった。それなのに……！）

アリスはデクスが落とした大剣を拾い上げる。魔物を操ることは微塵(みじん)も頭に浮かばなかった。

「死んじゃえっ!!」

デクスの命を奪ったエミルに突進してゆく。

だが、そのとき、背後から強い衝撃が伝わってきた。

「……な……マルタ……ちゃん……」

そろそろと顔を上げると、マルタはくるりと背を向ける。

「……いいよ。思い切り恨んでくれて。だけど、エミルを傷つけるのは許さない」
「……マルタちゃんが本気で来るとは思わなかった。不覚だわ……」
（いつの間に、こんなことになってしまったんだろう。いつの間に……）
アリスは必死に、時間を遡り始めた。
――ハーフエルフだろ。
――あんたは強くなるよ。
――……途中で死ななけりゃ長生きするね。
ハイマに住んでいた老婆の言葉が遠く聞こえた。
（……いつの間に……ねえ……）
だが、なんの答えも出ないうちに、アリスはうつ伏せに倒れ込んだ――。

エピローグ

「デクス……。今……アリスちゃんも……」
ハイマに吹きつけていた強い風は天に踊り、アリスを今ある場所へとそっと降ろした。
ふっと、音が遠のく。
まだぬくもりの残っているデクスの指に、ようやく自分の手が、届いた。
そっと重ねる。
「アリスちゃんも……追いかける……から……」
唇（くちびる）の動きだけでそうつぶやく。
（もっと早く、気づけばよかったかな……。そうすれば、もっと違う日々があったのかも……）
幼いデクスが、毎日見上げていたあの空。
雲が風にちぎれ、夢を放つには高すぎた空の下、ふたりで旅をした。
自分ひとりで世界を変えるつもりでいた。

自分ひとりで〝力〟を得たのだと思っていた。

(私が、本当に欲しかったのは……。ううん、これでよかったのよ……)

追いかけてゆく先はわかっている。

今度こそ還るのだと、アリスは想う。

次は絶対に負けないんだから――。彼女はそっと目を閉じた。

アリスの唇に最期の微笑が浮かんだ。

おわり

あとがき

こんにちは、矢島（やじま）さらです。
『テイルズ オブ シンフォニア-ラタトスクの騎士-』外伝の上巻です。
本編の最終巻から一年半くらいたってるんですねー。あっと言う間だった気がします。
この『果てない想い』には、全部で四篇のお話が入りまして、上巻にアリス&デクス。下巻にはリヒター、コレット、マルタの物語です。アステルや、小さいころのマルタも出てくる予定です。

このアリス編は、ゲーム中のサブイベント『アリスの過去』を元に作ったものですが、あれを見て思わずほろりと泣いた人も多いはず。
アリスとデクスは同じ孤児院で知り合った親のいない子どうしなんですね。いろいろ

あって共に旅をすることになり（ほとんどデクスが一方的にくっついてきてる感じですけど）、ヴァンガードに入ってふたりともそれなりの地位にのぼり……。デクスってずーっとあんなおバカな感じなのかと思ってたら、実はすごーく男らしいカッコいい人だった（でもやっぱり抜けてたり）。かわいくて意志の強そうなアリスちゃんだけど、心には不安とか、自分でも気づかないような気持ちを抱えてたり。

意外な一面が覗けまくりのサブイベントです。

このふたり、命を落とさなかったらどうなっていたのかなあ。

個人的に入れたかったのは、デクスの通販への熱い思い（笑）。

生まれて初めて通信販売を知ったデクス少年のキラキラ目を書きたかったのです。コレットじゃないけれど、いろんな「まにあ」がいますからねぇ。デクスには通販が便利すぎて魔法のように思えたのかもしれない。ゲームに出てくるもの以外で、他にどんなものを買ってたのか知りたい気がします。きっとまたアリスちゃんが振り向いてくれるかもしれないグッズ、なんでしょうね。そしてまた騙（だま）されるという……。デクスは

ほんとに憎めません。うん。
エミルとマルタもそうですが、デクスとアリスもお互いを補い合うカップルというか、やっぱりお似合いですよね〜。

生まれて初めてといえば……。
と、これは私の話になってしまいますが。私、いまだかつてものもらいと中耳炎（ちゅうじえん）になったことがなかったんです。ほんとはこのリストに捻挫（ねんざ）も入ってたんですが、捻挫は無事経験しまして。
そしてこの間ついに、ものもらいもやりました。わーい。眼帯（がんたい）ってしたことないのでちょっとその不自由さに憧れてたんですが、腫れないタイプのものもらい（霰粒腫（さんりゅうしゅ）というらしいです）だったので、がっかりでした。しかも目薬が効きすぎて、たったの二日で治っちゃいました。
捻挫も、スポーツ中に派手にやったとかじゃなく、なんと公園のベンチに座ってたら、そこにトラック用の大きなタイヤが転がってきて右足の上を通ったの。タイヤを転がし

て子供たちが遊べるようになってたんですけど、決して勢いよく転がってきたわけじゃなくて。ころころころ〜、あー、轢(ひ)かれちゃったぁ、とか思ってたら、どんどんどんどん足首が腫れてきたのでした。病院で状況を説明したら、ものすごく怪訝(けげん)そうな顔をされたっけ……。

ものもらいといい捻挫といい、私ってなんだか中途半端だなあ。せめて中耳炎は派手に、って、期待しちゃだめですね。痛そうだし。

さて、しつこくかえる日記。

最後の一匹、アマゾンツノガエルが逝(い)ってから、もうすぐ一年になります。もうね、ベルツノガエルでもアマガエルでもなんでもいいから飼いたくて仕方ないのだけど、意地になってる感じ（さっさと飼えばいいんですが……）。

最近では禁断症状が出て、ベッドのところに薬局の店頭用コルゲンのケロちゃんをどどんと置いております。

目が覚めると、ちょうどかえるの下あごのあたりが目に入ります。このアングルが斬

新で、毎日一瞬「なんだこれ？」って思う（笑）。
そして起き上がると台座に取り付けてある広告（取り外せないのですよ）の、藤竜也(ふじたつや)・いかりや長介(ちょうすけ)両氏と目が合うという、すばらしい朝を迎えております。ふふふ。

というわけで、今回も本編に引き続き、シナリオの実弥島巧(みやじまたくみ)先生、イラストはバンダイナムコゲームスの奥村大悟(おくむらだいご)氏に大変お世話になりました。
奥村氏にはいつも素敵なイラストをたくさん描いていただいていますが、な、なんと『果てない想い』では、人物紹介イラストがさらに豪華に〜！
上下巻を合わせると一枚絵になります。ぜひ次回の下巻とつなげて、リヒター、コレット、マルタのお話と一緒にお楽しみくださいね。

それから、このゲームをまだプレイしてないよー、という方にお知らせです。
『テイルズ オブ シンフォニア-ラタトスクの騎士-』は現在、Wii『みんなのおすすめ

セレクション』として、うれしくもお手ごろなお値段で発売中～。アリスとデクスの活躍を、ぜひぜひゲームでも！

それでは、またお会いしましょうっ。

二〇一〇年二月

矢島さら

矢島さらの著作リスト

テイルズ オブ デスティニー
運命をつぐもの上下
青の記憶
蒼黒の想い上下

テイルズ オブ ファンタジア
はるかなる時空上下
真紅の瞳　紺碧の絆
琥珀の回廊　瑠璃の夢

テイルズ オブ エターニア
永遠のきざはし全3巻
蒼天の星上下　暁の約束上下
リッドのとかげ　キールの希望

テイルズ オブ デスティニー2
蒼黒の追憶上中下
朱鷺色の風

テイルズ オブ シンフォニア
久遠の輝き全4巻
青翠の器

テイルズ オブ リバース
第一話 落日の瞬間上下
第二話 偽りの再誕上下
第三話 新たなる時代

テイルズ オブ ジ アビス
緋色の旋律上中下
真白の未来上下
黄金の祈り上下

テイルズ オブ シンフォニア-ラタトスクの騎士-
世界の願い全3巻
果てない想い上

テイルズ オブ ヴェスペリア
金の満月　青の天空　銀の明星

9784047264014
ISBN978-4-04-726401-4
C0193 ¥640E
1920193006407
定価 本体640円 ＋税
発行◯エンターブレイン

Famitsu Bunko

両親を目の前で魔物に殺された幼いアリスは、ハイマにある親のいない子供たちの施設に引き取られることになった。が、ハーフエルフという理由で差別されてしまう。しかし、同じ施設にいたデクスだけは、彼女を差別しなかった。強くなりたい！ 力を求める彼女は、ある日、魔族と契約を交わし……。

人気RPGの外伝が登場!! 上巻は、主人公エミルやマルタに敵対していた、ヴァンガードのアリスとデクスの物語です。